

和田川及び波見川局部改良事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下伊倉城跡

下伊倉遺跡

1989年3月

鹿児島県教育委員会

序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が一級河川肝属川支流和田川及び波見川局部改良工事に先だって、昭和62、63年度に実施した下伊倉城跡及び下伊倉遺跡の発掘調査の記録です。

今回の発掘調査では、下伊倉城の内濠・外濠跡、土塁の基礎部分、柱穴等をはじめ、弥生時代の溝状遺構や土器等が多数出土し、多大の成果を収めました。

本書は、鹿児島県の古代・中世の歴史の解明に貴重な手掛りを提供するものと考えており、地域の歴史の研究や文化財保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった県土木部河川課、東串良町教育委員会並びに地元の方々に心から感謝いたします。

平成元年3月

鹿児島県教育委員会

教育長 演 里 忠 宣

例　　言

1. 本報告書は、一級河川肝属川の支流である和田川及び波見川局部改良事業に伴う下伊倉城跡・下伊倉遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 発掘調査。報告書作成に当たっては、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、同三木靖氏、鹿児島県古石塔研究会副会長河野治雄氏の指導・助言を得た。
 3. プラントオパール分析については、宮崎大学農学部助教授藤原宏志氏に依頼した。
 4. 本書で用いたレベル数値は海拔高である。
 5. 報告書作成に係る実測、測量、レイアウト、挿図作成、写真撮影、図版作成、及び編集は、吉永・宮田が行った。
- なお、執筆分担は下記のとおりである。

第1章、第3章、第5章	吉永 正史
第2章、第4章、第6章	宮田 栄二
付論1	三木 靖
付論2	河野 治雄
付論3	藤原 宏志

目 次

序 文

例 言 3

第1章 調査の経過 9

 第1節 調査に至るまで 9

 第2節 調査の組織 9

 第3節 調査の経過 10

第2章 遺跡の位置及び環境 14

 第1節 位置と地形 17

 第2節 遺跡周辺の遺跡と歴史的環境 23

第3章 調査の概要 23

 第1節 確認調査の概要 23

 第2節 緊急発掘調査の概要 28

第4章 土層 31

第5章 下伊倉城跡の調査 41

 第1節 調査の概要 41

 第2節 歴史時代の遺構 41

 第3節 その他の遺構 51

 第4節 歴史時代の遺物 51

 第5節 小結 59

第6章 下伊倉遺跡の調査 61

 第1節 下伊倉遺跡の概要 61

 第2節 弥生時代の遺構 61

 第3節 弥生時代の遺物 69

 第4節 古墳時代の遺物 73

 第5節 歴史時代の遺構 74

 第6節 歴史時代の遺物 74

 第7節 小結 79

付論1 古石塔について 113

表 目 次

第1表	遺跡関連の遺跡	18
第2表	遺跡周辺の中世城館跡	20
第3表	ピット群1の計測表	43
第4表	ピット群2の計測表	43
第5表	下伊倉遺跡出土器観察表	73

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置の地形	14
第2図	遺跡周辺の遺跡と中世城館跡等分布図	15
第3図	遺跡周辺の地形と確認トレンチ配置図	21
第4図	確認調査トレンチ土層断面図(1)	25
第5図	" (2)	27
第6図	" (3)	28
第7図	全面調査の調査範囲及びグリッド図	29
第8図	基本土層柱状模式図	31
第9図	下伊倉遺跡土層断面図	33
第10図	下伊倉城跡土層断面図(1)	35
第11図	" (2)	37
第12図	下伊倉城跡実測図及び遺構配置図	39
第13図	溝1平・断面図	41
第14図	溝2平・断面図	42
第15図	ピット群1、2及び古道平・断面図	44
第16図	井戸状遺構平・断面図	45
第17図	濠土層断面図	47
第18図	塹平・断面図	49
第19図	下伊倉城跡出土遺物(1)	52
第20図	" (2)	53
第21図	" (3)	55
第22図	" (4)	57
第23図	" (5)	58
第24図	溝状遺構1・2平・断面図	62
第25図	溝状遺構1・2内遺物出土分布図	63

第26図	溝状遺構 2 出土遺物	64
第27図	遺物出土分布図 (1)	65
第28図	(2)	67
第29図	弥生時代の遺物 (1)	70
第30図	(2)	71
第31図	弥生時代の石器・軽石製品	72
第32図	古墳時代の遺物	73
第33図	歴史時代の遺構	75
第34図	歴史時代の遺物 (1)	77
第35図	(2)	78

図 版 目 次

図版 1	航空写真 西側上空から	81
図版 2	(上) 航空写真 東側上空から (下) 同左 北側上空から	82
図版 3	(上) 下伊倉城跡近景 東より (下) 同左 南より	83
図版 4	(上) " (増水時) 東より (下) 同左 西側外濠	84
図版 5	(上) 確認調査風景 (下) 確認調査第 6 ~ 9 トレンチ	85
図版 6	(上) 確認調査第 15 - c トレンチ土層 (下) 同左 第 21 トレンチ土層	86
図版 7	(上) " 第 23 トレンチ土層 (下) 同左 第 20 トレンチ土層	87
図版 8	(上) " 第 37 トレンチ土層 (下) 同左 第 29 トレンチ土層	88
図版 9	全面調査伐採作業風景	89
図版10	全面調査発掘調査風景	90
図版11	"	91
図版12	(上) 下伊倉城跡土層 (下) 溝 1 確認状況	92
図版13	(上) 溝 1 検出状況 (下) 溝 2 検出状況	93
図版14	(上) ピット群 2 検出状況 (下) 古道検出状況	94
図版15	(上) 井戸状遺構断面 (下) 西側外濠断面	95
図版16	(上) 西側内濠断面 (下) 東側内濠断面	96
図版17	(上) 塚断面 (下) 下伊倉城跡出土遺物 (1)	97
図版18	(上) 下伊倉城跡出土遺物 (2) (下) 同左 (3)	98
図版19	(上) 同上 (4) (下) 同左 (5)	99
図版20	(上) 同上 (6) (下) 高山總繪圖 (部分)	100
図版21	(上) 下伊倉遺跡土層断面 (下) 溝状遺構 1 内遺物出土状況	101
図版22	(上) 溝状遺構 1 検出状況 (下) 溝状遺構 1 内遺物出土状況	102

図版23	(上) 溝状遺構 2 検出状況	(下) 溝状遺構 1、2 堀り下げ状況	…	103
図版24	下伊倉城跡遺物出土状況			104
図版25	"			105
図版26	"			106
図版27	溝状遺構 2 出土遺物 (1)			107
図版28	(上) 溝状遺構 2 出土遺物 (2)	(下) 下伊倉遺跡包含層出土遺物 (1)		108
図版29	下伊倉遺跡包含層出土遺物 (2)			109
図版30	"	(3)		110
図版31	下伊倉遺跡包含層及び表層出土遺物 (1)			111
図版32	"	(2)		112

第1章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

昭和60年度に県土木部河川課（鹿屋土木事務所）で一級河川肝属川の支流である和田川及び波見川の局部改良工事（幅約6mの拡幅改修工事）が計画された。

昭和61年4月、鹿屋土木事務所と東串良町教育委員会とで、下伊倉遺跡の取扱いについて協議が行われた。これに基づき同町では町文化財保護審議会に、当該文化財の取扱いについて諮問し、同年7月、東串良町文化財保護審議会から文化財を保護する方法を講じて欲しい旨の要望書が町教育委員会委員長に提出された。

昭和61年8月、県土木部河川課、鹿屋土木事務所、県教育庁文化課、東串良町教育委員会での取扱いについて協議が行われた。その後数回の協議が行われ、その結果、事前に確認調査を実施し、遺跡の範囲・性格等を明確にした上で、遺跡の保護と開発との調整を図ることとなった。

確認調査は、県教育庁文化課が調査主体者となって昭和62年4月～5月に実施した。対象地の面積は約5400m²である。

この確認調査の結果に基づいて、昭和62年6月、県土木部河川課、鹿屋土木事務所、県教育庁文化課とで協議が重ねられ、下伊倉城跡と弥生時代の包含層が確認された地区（下伊倉遺跡）については、緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。緊急発掘調査は、県教育庁文化課が調査主体者となって昭和63年7月18日から実施した。

第2節 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教 育 長	渕里 忠宣
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課 長	吉井 浩一
調査企画担当者	"	課 長 補 佐	川畑 栄造（昭和62年度）
	"	"	奥園 義則（昭和63年度）
	"	主 幹	森田 齊（昭和62年度）
	"	"	立園多賀生（昭和63年度）
	"	主任文化財研究員	
		兼埋蔵文化財係長	立園多賀生（昭和62年度）
	"	文化財研究員兼	
		埋蔵文化財係長	吉元 正幸（昭和63年度）
調査担当者	"	文 化 財 研 究 員	吉永 正史
	"	主 査	中村 耕治（昭和63年度）
	"	主 事	宮田 栄二（昭和63年度）
	"	"	東 和幸（昭和62年度）

調査担当者	鹿児島県教育庁文化課	主事	井ノ上秀文（昭和63年度）
調査事務担当者	鹿児島県教育庁文化課	企画助成係長	濱松巖（昭和62年度）
	"	"	京田秀尤（昭和63年度）
	"	主査	京田秀尤（昭和62年度）
	"	"	平山章（昭和63年度）
	"	主事	川畠由紀子（昭和62年度）
	"	"	末永郁代（昭和63年度）

なお、当遺跡の調査にあたっては、鹿児島県文化財保護審議会委員河口貞徳氏、三木清氏、鹿児島県古石塔研究会副会長河野治雄氏の指導助言を得た。

また、東串良町教育委員会及び作業員として地元の方々の協力を得た。

第3節 調査の経過

1 確認調査

確認調査は、昭和62年4月20日から5月19日まで実施した。

4月20日（月） 確認調査の開始。プレハブ等の設営。発掘諸道具、機材等の搬入。作業員への作業内容の説明及び諸注意の伝達。第16、15-C、15-E、12、10、11、14トレンチの設定及び掘り下げ。第16トレンチにて土塁の版築様の基盤があり、その下位に古道様のものを確認。

4月21日（火） 第10、11、13、14、15-C、15-E、16トレンチの掘り下げ。第10トレンチでは内濠法面を土塊状のもので積み上げている。第11トレンチでは版築状の土塁基礎を確認。

4月22日（水） 第13、14、15-C、15-E、16トレンチの掘り下げ。第13トレンチにて塚は版築による盛り土であることを確認。第14トレンチでピット3個を確認。第16トレンチで内濠法面を確認。第19トレンチの設定及び掘り下げ。

4月23日（木） 第13トレンチの塚の土層断面実測。第11、12トレンチ土層実測準備。第15-Eトレンチで基盤層が砂層であることを確認。第9、4トレンチの設定及び掘り下げ。

4月24日（金） 第4トレンチ掘り下げ。田の床土の下位は粘土と砂層がやや不整合に堆積。第9トレンチでは第4トレンチと同様である。内濠の外側法面がつかめない。第6トレンチの設定及び掘り下げ。城内にある古石塔の調査。

4月27日（月） 外濠の法面確認のため第7～10トレンチを1m幅で連続して設定し、掘り下げる。第14トレンチでのピットの平板実測。第21、23、24トレンチの設定。

4月28日（火） 第21トレンチで第5層上面で溝状遺構を確認し、西側へトレンチを拡張する。第23トレンチの第6層から壺形土器口縁部片出土。第23トレンチの設定。

4月30日（木） 標準土層の決定。灰色砂層を基盤層として14層に分ける。第21トレンチの3本の溝状遺構検出。第23トレンチの拡張。

- 5月1火(金) 第37トレンチの設定。第22、23トレンチ遺物検出作業。第21-Cトレンチの第7層より土器出土。
- 5月6日(水) 第21、22、23、37トレンチの掘り下げ。第37トレンチは沖積作用による堆積土か。
- 5月7日(木) 第21~23、37トレンチの掘り下げ。第16トレンチの古道様のものの広がり確認のため拡張する。
- 5月8日(金) 第21~23トレンチ基盤層までの掘り下げ終了。
- 5月11日(月) 第6トレンチで基盤層近くから湧水。第14、16トレンチ掘り下げ。土層実測及び埋め戻し作業。
- 5月13日(水) 土層実測及び埋め戻し作業。
- 5月14日(木) 土層実測及び埋め戻し作業。河口貞徳県文化財保護審議会委員による現地指導。藤原宏志宮崎大学農学部教授によるプラントオバール分析のための検体採取。
- 5月15日(金) 埋め戻し作業。河野治雄氏による古石塔調査。
- 5月18日(月) 埋め戻し作業。
- 5月19日(火) 埋め戻し作業。発掘諸道具等の点検及び撤出作業。確認調査を終了。
- 5月20日~7月24日 収蔵庫にて出土遺物の整理及び事業報告書作成作業。

2 緊急発掘調査

緊急発掘調査は昭和63年7月18日から10月31日まで実施した。

- 7月18日(月) 緊急発掘調査に着手。発掘諸道具等の搬入。作業員への諸注意・伝達。
蔽の伐操作業。
- 7月19日(火) 蔽の伐操作業。
- 7月20日(水) グリッドの設定。D-15・16区の表土剥ぎ。
- 7月21日(木) D-11・12、D-7・8区の表土剥ぎ。
- 7月22日(金) D-15・16区第2層までの掘り下げ。
- 7月25日(月) D-15・16区第5層までの掘り下げ。
- 7月28日(木) D-15・16区第5層まで、D-7・8区第6層までの掘り下げ。
- 7月29日(金) D-11・12区溝の確認。D-7・8区第6層掘り下げ。弥生式土器片と磨製石器出土。
- 8月1日(月) D-7・8区第6~7層掘り下げ。弥生時代中期の土器片出土。
- 8月2日(火) D-7・8区第6~7層掘り下げ。遺物出土状況平板実測。
- 8月3日(水) D-7・8区に第7層上部で溝状遺構を確認。D-11・12区拡張。
- 8月4日(木) D-7・8区の溝検出作業。溝内より大形壺形土器片出土。D-11・12区表土剥ぎ。

- 8月5日（金） D-11・12区、D-15・16区表土剥ぎ。
- 8月8日（月） D-7・8区に第8層上面で2号溝確認。D-15・16区第6層掘り下げ。弥生式土器片出土。町文化財保護審議会委員現地研修。
- 8月9日（火） D-7・8区2号溝検出作業。D-11・12区に第5層上面で3、4号溝確認。
- 8月10日（水） D-7・8区2号溝検出作業。仮B MN₆ 1のレベル測定(3,665m)。
- 8月11日（木） D-7・8区2号溝検出作業。
- 8月16日（火） D-7・8区溝清掃、写真撮影。D-11・12区の溝検出作業。
- 8月17日（水） D-11・12区の溝検出作業。5号溝を確認。
- 8月19日（金） D-12区第6～7層掘り下げ。土器片出土。
- 8月23日（火） D-11区5号溝検出作業。
- 8月24日（水） D-11区5号溝検出作業。D-12区第6～7層掘り下げ。第D-15、16区遺物出土状況平板実測。
- 8月25日（木） D-11区5号溝検出作業。D-15区表土～第7層までの掘り下げ。
- 8月26日（金） D-11区5号溝の清掃、写真撮影。D-12区第7～8層掘り下げ。
- 8月29日（月） D-7・8区2号溝1／20実測。D-11・12区実測準備。D-14～16区掘り下げ、遺物出土状況平板実測。
- 8月30日（火） D-11・12区2号溝1／20実測。D-14～16区第6～7層掘り下げ。
- 8月31日（水） D-14区第6～7層掘り下げ。D-16・17区掘り下げ。
- 9月1日（木） D-7・8区の排土除去。D-11区第6～7層掘り下げ。D-14～16区平板実測。
- 9月2日（金） D-7・8区の排土除去。D-14～16区第7～8層掘り下げ。D-11区第5～7層掘り下げ。
- 9月6日（火） D-7・8区の排土除去。D-11・12区第5～7層掘り下げ。D-14～16区第8層掘り下げ。
- 9月7日（水） D-7・8区の排土除去。D-11・12区第5～7層掘り下げ。D-14～16区第8層掘り下げ。
- 9月8日（木） D-11・12区第5～8層掘り下げ。D-14区第8層掘り下げ。
- 9月9日（金） C-7・8区排土除去。D-14区第8層掘り下げ。
- 9月12日（月） C-7・8区表土～第6層掘り下げ。
- 9月13日（火） C-7・8区第6～8層掘り下げ。1、2号溝検出。D-10、14区排土除去。
- 9月14日（水） C-7・8区1、2号溝検出及び平板実測。D-14区排土除去。
- 9月16日（金） C、D-7・8区1、2号溝の実測。C、D-10、D-13、14区表土剥ぎ。
- 9月19日（月） C、D-9、10区表土剥ぎ。D-13、14区第5～6層掘り下げ。
- 9月20日（火） C、D-9、10、13、14区第5～6層掘り下げ。
- 9月22日（水） C、D-9、10、13、14区第6～8層掘り下げ。

- 9月26日（月） D-13、14区第6～8層掘り下げ、C、D-9、10区表土剥ぎ。
9月27日（火） D-6、9、10区表土剥ぎ。D-13、14区深掘り。土層写真撮影。
9月28日（水） D-6区表土～第7層掘り下げ。D-9、10区表土～第5層掘り下げ。
9月29日（木） D-6区第7層掘り下げ。D-9、10区第6～7層掘り下げ。D-19、20区内
内濠掘り下げ。
9月30日（金） D-19、20区内濠掘り下げ。土層実測。
10月3日（月） D-19、20区内濠掘り下げ。D-21区表土～第5層掘り下げ。
10月4日（火） D-23～26区表土～第2層掘り下げ。C、D-9、10区平板実測。
10月5日（水） D-23～26区排土処理及び表土剥ぎ。D-26、27区表土剥ぎ。D-19、20区内
内濠掘り下げ。
10月6日（木） C、D-27、28、30～34区表土剥ぎ。道路部分は破壊されている。C-35、
36区塚部法面伐採作業。
10月7日（金） C-36区伐採作業。D-18区土墨及び西外濠掘り下げ。C-30～35区道路部
分掘り下げ。B、C-38～40区トレーナー設定。
10月11日（火） C、D-6～15区機械力による表土除去。
10月12日（水） D-18、19区表土剥ぎ。D-19、20区内濠掘り下げ。
10月13日（木） C、D-22～35区遭構検査作業。D-19、20区内濠土層実測。
10月14日（金） C、D-22～35区遭構検査作業。C-17、18区外濠掘り下げ。
10月17日（月） C-17、18区外濠掘り下げ。
10月18日（火） C-17、18区外濠掘り下げ。
10月19日（水） C-17、18区外濠掘り下げ及び土層実測。
10月20日（木） D-22～35区遭構検査作業。C、D-22、23区古道及びピットを確認。
10月21日（金） D-22～35区遭構検査作業。26、27区ピットを確認。
10月24日（月） C、D-28区溝を確認。土層実測。濠部分の埋め戻し。C-22～27区。土層
実測用深掘り作業。C-34区大形の掘り込みを確認。用地外に延びる。
10月25日（火） C、D-28区溝の掘り下げ及び実測。土層実測。濠部分の埋め戻し。
10月26日（水） C-26、27区ピットの検出作業及び実測。C、D-29区溝を確認。
10月27日（木） C、D-29区溝の実測。C-28、29区土層実測。濠部分の埋め戻し。
10月28日（金） 土層実測。城跡周辺部の実測。濠部分の埋め戻し。
10月31日（月） 発掘諸道具等の点検、搬出。発掘調査を終了。

昭和62年11月1日（火）より県教育庁文化課重富収蔵庫において整理作業及び報告書作成作
業を行った。

第2章 遺跡の位置及び環境

第1節 位置と地形

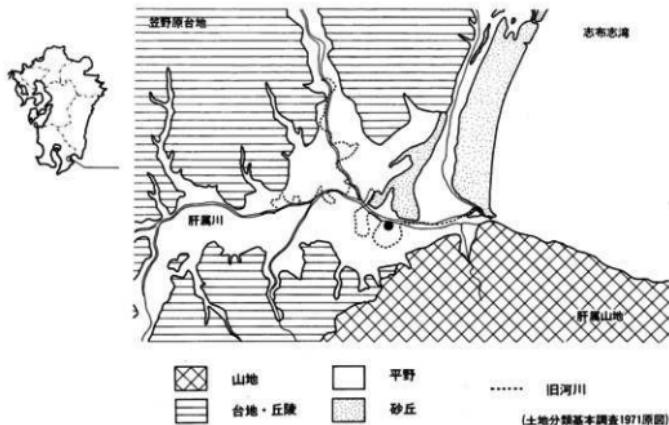
下伊倉遺跡及び下伊倉城跡は、肝属郡東串良町新川西下伊倉に所在する。

大陸半島のはば中央に位置する東串良町は、鹿屋市の東にあり、北に大崎町、西に串良町、南側は高山町に接し、東は志布志湾に面している。

遺跡は東串良町と高山町の境界付近に位置し、遺跡の北側には肝属川が東流している。肝属川は高隈山地の御岳に源を発し、姶良川・高山川・串良川の支流と合流し、蛇行しながら東流している。そして志布志湾へと注ぎ、その流域には広大な肝属平野が形成されている。蛇行していた河川跡は現在もなお町界となり往時がしのばれ、下伊倉付近も大きく蛇行していた旧河川に囲まれた部分である。

遺跡付近は肝属川による自然堤防であり、下伊倉、川西、池之園等の集落はこの上に営まれている。遺跡周辺の地形は、北側には永吉台地と、串良川をはさみ笠之原台地が広がり、南側には肝属山地とその西側に新富台地がある。遺跡のすぐ北側には標高5~7mの旧期砂丘が北方向に伸び、その部分に集落が営まれ、古くは唐仁古墳群も存在している。また肝属川河口から北の志布志海岸には新期砂丘が形成されている。

なお、下伊倉遺跡及び下伊倉城跡の標高は約3~4mであり、肝属川河口より約3.4kmの距離に所在している。



第1図 遺跡の位置と地形



第2図



第2図 遺跡周辺の遺跡と中世城館跡

国土地理院発行 5万分の1地図使用

第2節 遺跡周辺の遺跡と歴史的環境

旧石器時代の遺跡は、東串良町・串良町・高山町ではまだ発見されていない。大隅半島中部地区においては隆蒂文が出土した伊敷遺跡が知られるのみで、これまで明確な石器等の出土は知られていなかったが、最近鹿屋市櫻崎A遺跡で組石刃核・組石刃が検出されている。

縄文時代の遺跡は、笠野原台地末端に位置し、早期石板式が出土した古園遺跡(23)や、縄文後期の富ヶ前遺跡(26)があり、また境川上流に市来式土器や指宿式土器を出土する瀬戸宇字A・B遺跡(111・112)や、その中流域に若干の遺跡が知られている。

弥生時代になると、遺跡数が増大し、多くの遺跡が存在している。そのうち、花牟礼遺跡(83)は、昭和24年東大の駒井和愛博士・八幡一郎氏等によって発掘調査が行われ、県下で初めて住居跡が検出された遺跡として研究史上著名な遺跡である。また、吉ヶ崎遺跡(42)は、昭和52年に確認調査が実施され、2基の住居跡が重複して検出された。1号住居は火災を受けたもので、床面に密着した状態で壺形土器や壺形土器の完形土器が8点と磨製石斧2点、磨製石鎌3点が出土した。壺形土器は全て充実した脚台を有し、口縁部は逆し字状に外反し端部はわずかに凹むもの他に、端部をまるく納めるものもある。胸部上位に、三角突帯を二条廻らすものや、三条あるもの、あるいは三角突帯が付かないものもある。壺形土器は膨む胸部で、頸部はしまり大きく外反する口縁部にヘラによる暗文が施されたものや、長胴気味のあまり張らない胸部で、頸部がやや長く、口縁部は垂れ下がり気味に外反するものがある。これらのものは山ノ口式に含まれている。その他多くの遺跡は未調査であり、性格等は不明に近く、遺物が採集されているのみである。採集資料のなかには、下伊倉城跡内の完形壺形土器もある。

古墳時代になると、前期砂丘上には前方後円墳6基を含む、総計132基からなる唐仁古墳群(9)が形成される。その中の1号大塚古墳は柄鏡式の前方後円墳であり、全長約185mと本県最大のもので竪穴石室内には凝灰岩製の舟形石棺が置かれている。昭和9年国指定史跡となっている。これと肝属川を隔てている塚崎古墳群(78)は、前方後円墳4基、円墳39基が現存しているが実際はもっと多かったと思われる。この他にも多くの墳丘を持つ古墳群が所在している。また、岡崎古墳群(21)の4号墳は、昭和60年調査が行われ、木棺と推定された主体部直上から壺1点と高坏10点が出土し、さらに周溝内に竪穴部を設けた地下式横穴墓が3基確認されている。また、上古原古墳群では古い樽型窓が出土している。

歴史時代になると、肝付氏の居城である高山城(75)の他、下伊倉付近には曲之城(6)、堀込城(11)、別府ヶ城(12)、波見城(64)、和田城(67)など多くの中世城跡が存在している。特に、高山城は昭和22年国指定を受けているもので、城の規模は大きく、遺構の残存度も良好である。

注) 鹿屋市櫻崎A遺跡

昭和63年4月から鹿児島県教育委員会において発掘調査を実施中である。

第1表 遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等	備考
1	下伊豆城跡	東串良町新川西下伊倉	後高地	弥生・中生		本報告
2	舟塚	東串良町川東舟塚	沖積地	弥生中期	弥生土器・打製磨製石斧	
3	安留	"	"	"	"	
4	役所	"	"	"	彌形高杯等	
5	三十石	"	"	弥生・古墳	成川式土器	
7	古市	"		弥生・古墳	土器、奈良平安	
8	新川西	"	新川西麦塚	沖積地	弥生	弥生土器
9	唐仁古墳群	川西	"	古墳		地元資料に古生中期の古墳遺跡記載あり。
13	堅田	串良町上小原岡崎堅田	"	弥生	成川式	
16	宮ノ下	"	有里宮ノ下	"	"	石斧
19	小塚	"	岡崎小塚		古墳	地下式横穴
20	岡崎の上	"	上小原有里岡崎の上	台地	弥生	弥生土器
21	岡崎古墳群	"	有里岡崎	台地末端	古墳	
22	北田／上古墳	"	北田ノ上	"	古墳	
23	古園	"	岡崎古園	台地	縄文・弥生	石板式
24	上ノ馬場	"	上ノ馬場	"	古墳	土器、成川式
25	古橋	"	古橋	"	弥生・古墳	
26	富ケ尾前	"	有里富ケ尾	"	縄・弥・古	縄文後期土器、土器
27	牧原	"	牧原	"	弥生	古墳
28	平野上	"	下小原平野上	"	弥生	
29	白塞水上	"	白塞水上	"	古墳	
30	フゾ山	"	白塞水	"	古墳	石棺・直刀
31	白塞水古墳群	"	"	"	古墳	地下式横穴 円墳1基 地元資料に1基
32	白塞水	"	"	"	古墳	
33	鍋池ノ上	"	鍋池ノ上	"	弥生	
34	後藤追	"	後藤追	"	弥生	
35	村道	"	村道	"	弥生	
37	坂ノ下古墳群	"	上小原坂ノ下	"	古墳	円墳1基 地元資料に1基
38	鉢龜岡	"	鉢龜岡	"	弥生	弥生土器
39	上小原古墳群	"	下方限	"	古墳	古式圓底器(輪形切端)・片方底円筒口・高さ内張り式横穴 上部・底部・側面・側面・側面・側面
40	栄田	"	上小原栄田	低地	弥生	磨製石劍
41	神ノ園	"	上ノ園	台地	弥生	山ノ口式・須次式
42	吉ヶ崎	"	吉ヶ崎	"	弥生・古墳	住跡、愛・壹・磨製石劍
43	上小牧	"	上小牧	"	縄・弥・古	縄早(条幅文系土器)
45	アマガ坂古墳群	"	久保	"	古墳	円墳4基 地元資料に1基 円墳2基
46	供養塚古墳群	串良町上小原平床	"	"	古墳	
48	松崎	"	松崎	"	弥生	
50	上別府	"	上別府	"	弥生	
52	辻古墳群	高山町富山辻	"	古墳	古墳群	
54	今市	"	今市	"	古墳	舟形出土品不明
55	大塚原	"	大塚原	"	弥生	打製石斧
56	今市牧	"	今市牧	"	弥生	弥生土器、石斧
57	辺塚古墳群	"	辺塚	"	古墳	古墳群
59	宮ノ上	"	宮下宮ノ上	"	古墳	"
60	イヤの前	"	イヤの前	"	古墳	古墳
61	前烟	富山前烟	"	弥生	弥生土器、石斧	
61	天神原	宮下天神原	"	弥生・古墳	弥生土器、石斧	
62	波見公園(裏)	波見公園裏	丘陵	弥生	磨製石斧	
65	長谷	"	荒瀬長谷	"	古墳	土師
66	平後園	"	平後園	山腹	弥生	圓底器・磨製・打製石斧
68	横溝	野崎と田横溝	山腹	弥生中期	弥生土器・打製石斧	
69	津曲	"	津曲	沖積地	弥生	弥生大型壺
70	西大園	"	西大園	台地末端	弥生	弥生土器
72	上原	"	上原	"	弥生中期	弥生土器・磨製石斧 S33住跡発見
73	安野	"	安野	丘陵	弥生	弥生土器・磨製・打製石斧
74	安田	前田本城安田	山腹	弥生	弥生土器・磨製石斧	

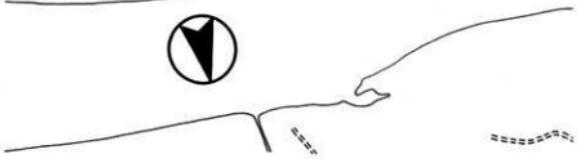
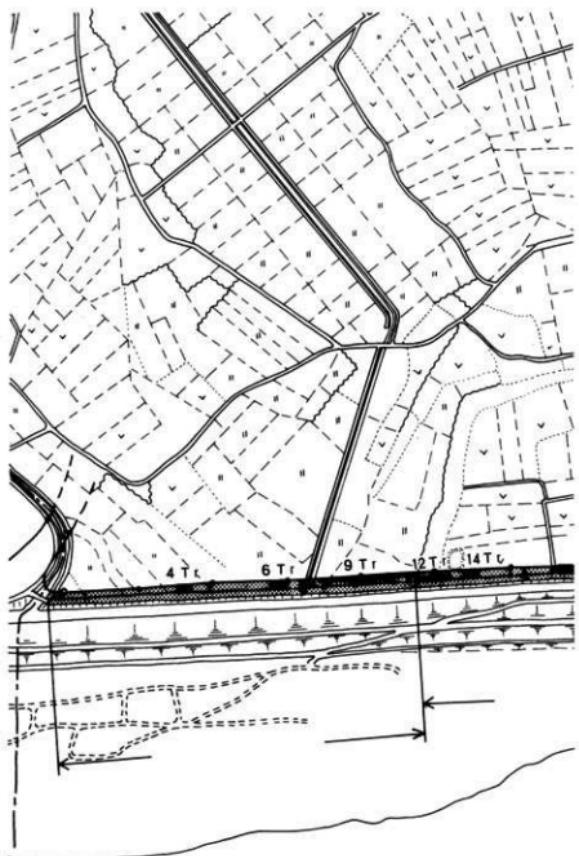
番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等	備考
78	塚崎古墳群	高山町野崎塚崎	台地末端	古墳	土師器	
79	塚崎	" " 塚原	"	弥生・古墳		
80	原	" " 塚崎原	"	弥生		
81	塚 返	" " 塚崎塚返	"	弥生・古墳	土師器	
83	花 車 礼	" 新富花車礼	"	弥生	弥生中期・付近に円墳 弥生土器・磨製石器	住居跡(S24調査)
84	手 追	" " 手追	"	弥生・古墳		弥生土器・磨製石器 土師器
85	大 戸 原	" 大戸原	"	"		S55調査
86	上 永 山	" 上永山	"	弥生	弥生土器・磨製石器	
87	横 間 土 坡	" 横間	"	弥生・古墳		S24.7.26, 8.31, 9.6; 清水 昭和24年7月26日、8月31日、9月6日
88	丸 岡 古 墳 群	" 米山寺墓地	"	古墳	古墳群	
90	川 路	" 川路	台地	弥生・古墳	土師	
91	長 珠 庵	" 長珠庵	"	古墳	"	
92	中 村 園	" 中村園	"	弥生・古墳		
93	下 永 山	" 永山	"	"		
94	下 住	" 前田下住	沖積地	弥生	弥生土器	
95	内 园	高山町前田三反内園	"	弥生		
96	上 / 原 遺跡	" 上 / 原	台地末端	"	地下式横穴	
97	上 / 原	" "		弥生・古墳		
98	前 田 下 西	" 下西方			弥生式横穴	
100	上 西 方	" "	台地末端	弥生・古墳		
101	堂 園 の 上	" 堂園の上	台地	弥生	弥生土器・石器	
102	西 宮 神 代	" 西宮神社	"		弥生式横穴	
103	軍原古墳群	" 上大脇軍原	台地末端	古墳		
105	訪 調 / 上	" 上西方訪調 / 上	"	弥生・古墳	弥生土器	
106	寺 / 上	" " 寺 / 上	"	"	土師	
108	池 / 上	" 池 / 上	台地	"	弥生土器・磨製石器・土師 瓦器類	
109	本 城 入 口	" 本城入口	"	弥生	弥生土器	
110	瀬 戸 古 墳	" 後田瀬戸古塚原	"	"	弥生土器・打製石斧	
111	瀬 戸 字 治 A	" " 宇治	"	繩文	市来式、南高式土器 磨製石器・打製石器	
112	" B	" "	"	繩文・弥生	山形式・南高式土器 打製石器	
113	中 原	" 中原	山麓	弥生	弥生・土器	
114	永 野 原	" 永野原	台地	弥生・古墳	弥生土器・磨製石器・打製石器 土器類	
115	山 下	" 山下	"	"	土師	
116	道 中 原	" 道中原	"	繩・弥、古	"	住居跡
117	瀬 戸 口 原	" 白坂瀬戸口原	"	弥生・古墳	石斧丁・石器(有茎磨製)	
118	山 下 / 上	" 山下 / 上	"	繩 文	石斧	
119	白 坂	" 白坂	"	弥生	地下式横穴	
120	桶 何 岡	" 桶何岡	"			
121	小 占 田 上	" 小占田上	"	弥生・古墳	土師	
122	錢 亀	" 錢龜	"	弥生		
123	檢 見 嶺	" 檢見嶺	台地末端	古墳		
124	北後田古墳群	" 稲村	"	"	かめ格	
127	稻 村、高 塚	" 稲村高塚	"	弥生	弥生土器	
128	池 山	吾平町下名論地池山	"	繩文	塞ノ式	
	池山古墳群	" 論地池山	"	弥生・古墳	成川式、土師	
129	井 神 島	" 下名井神島	丘陵	弥生	弥生土器	
131	井 牛 田 原	" 鹿井牛田原	台地	"	成川式	
132	論 地	" 論地	"	繩文・弥生	成川式	
133	霧 島 原	" 霧島原	"	弥生・古墳	成川式、須恵器、土師	
134	寺ヶ迫古墳群	" 寺ヶ迫	"	古墳		
135	三 角 原	吾平町鹿三角原	"	弥生・古墳	弥生土器、土師	
136	反 田 原	" 反田原	"	繩文・弥生	"	
137	境 原	" 境原	"	弥生・古墳	成川式土器、土師	
138	中 尾	" 上名中尾	"	弥生・古墳	土師、須恵	
140	赤 野 原	" 鹿赤野原	"	弥生	石斧	
141	鏡 原 原	" 上名鏡原上	"	"	弥生土器、石斧	
142	鏡 原 原	" 鏡原	"	繩・弥・古	市来式、阿萬式、成川式	
144	西 山 / 上	高山町波見西山 / 上	"	奈良～平安	須恵器風字硯	高山町歴史館保管

第2表 遺跡周辺の中世城跡等

番号	遺跡名	所在地	地形	時期	遺物等	備考
6	曲之城跡	東串良町新川西字曲之城	平地			
10	琵琶城跡	" "	字琵琶	"		
11	堀込城跡	" "	字崩尾	"		
12	別府ヶ城跡	"	小字別府ヶ城	"		
14	肝付氏古城跡	串良町岡崎字西ノ丸	"	平安末期~	(別)西ノ丸居館	
15	肝付氏古城跡	" 下小原字圓田	"	南北朝時代~ 天保9年	(別)城ノ園	
17	串良城跡	"	岡崎字號	台地端	文明2年~	(別)鶴亀城
18	地頭館飯屋跡	" "	2088	台地下		町指定
22	岡崎城跡	" "	字城ヶ鼻	台地端	正平9年~ 応永18年	堀・空堀・土塁 (別)城ヶ鼻
23	中村城跡	" "	字竹之内	丘陵	南北朝初期~	
36	白寒水城跡	"	下小原字白寒水	台地端	南北朝初期~	
44	小原城跡	" 上小原字城ヶ崎	"	南北朝初期	(別)城ヶ崎城	
47	松崎城跡	" "	字松崎	"	南北朝初期~	
49	中山城跡	" "	字中山	"	-南北朝初期	
53	富山城跡	高山町富山字當迫	丘陵	弘安5年~ 天正8年		
58	宮下城跡	" 宮下字堀内	丘陵平地	南北朝時代		
63	波見の陣跡	" 波見字牛札	山麓	弘安6年~		
64	波見城跡	" "	字轟	"	弘安の頃~	
67	和田城跡	" 野崎字和田	"	永禄時代		
71	天道山墨跡	"	字天道山	丘陵	建武2年~ 永禄9年	計画式出城の一丸、二の丸 馬廻、施設跡発存
75	高山水跡	" 新富字本城	山頂丘陵	正平9年~承元2年	本丸、二の丸、大手門跡 馬廻、茶湯跡	(別)肝付城、山之城 本城、国指定
82	塚崎城跡	" 野崎字塚崎	平地	永禄年間		
89	弓張城跡	" 新富字城山他	丘陵	正平5年~ 文慶9年		(別)麗ノ城
104	合戦田の陣	" 前田字上西方	"	承元3年~ 天正8年		(別)古城
107	御幣薬城跡	"	字大船	"	南北朝時代	(別)大船城
125	堂園の陣	" "	字長能寺	"	承元3年~	
126	検見崎城跡	" 後田字検見崎	平地	承元9年~ 永禄9年	空堀	
130	井上城跡	吾平町下名字井神島他	丘陵	正平年間~ 文慶年間	" . 土器	(別)末次城
143	松下城跡	" 上名字西寺他	"	戰國時代~	" "	免罷有
51	養福寺跡	高山町富山社		江戸時代		
76	本城廢崖仏	" 本城	断崖		石仏2体判明	道隆寺址の西崖下
77	道隆寺跡	" "	小丘		楚石、石燈籠廢仏等	(史)町 S 46.2.25
99	盛光寺跡	" 前田上西方	台地末端			
139	赤野板碑	吾平町上赤野			五輪塔	

参考文献

- 「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県教育委員会 1983年
- 「牛牟礼(大戸原) 遺跡」高山町教育委員会 1981年
- 「鹿児島市市町村別遺跡地名表」鹿児島県教育委員会 1985年
- 「岡崎4号墳・1号地下式横穴」串良町教育委員会 1986年
- 「鹿児島県の中世城跡」鹿児島県教育委員会 1987年
- 「土地分類基本調査(鹿屋・志布志)」鹿児島県 1972年
- 「東串良郷土史」東串良町
- 「高山町郷土史」高山町





第3図 遺跡周辺の地形及び確認トレンチ配置図



- 21 ~ 22 -

第3章 調査の概要

第1節 確認調査の概要

1 調査の概要

確認調査は、濠によって囲まれた下伊倉城跡関係部分とその他の部分(埋蔵文化財包蔵地等)とに分け、さらに下記のように4地区に細分して調査を実施した。

第1地区 下伊倉城より東側の水田地帯。

第2地区 下伊倉城跡地区(外濠に囲まれた部分)。

第3地区 下伊倉城跡より西部のうち東串良町管内地区。

第4地区 下伊倉城跡より西部のうち高山町管内地区。

調査は2m×5mのトレンチを基本にしたが、調査対象地区(河川改修予定地区)内には波見川に隣接して東西に走る道路が北側にあるため、道路と平行になるように設定して掘り下げを行った。そのため、トレンチ幅が1.5mしかとれないものもあった。また状況に応じてトレンチの拡張を適宜行って調査を実施した。

トレンチの呼称は設定順位や位置等の煩雑を避けるため、畠地を一筆毎に東から番号を付して、トレンチを設定した畠地の番号を利用することにした。

調査の結果、第1地区においては、遺構及び遺物包含層は確認されなかった。また、水田に関する遺構も確認できなかった。第2地区においては、城跡に関する遺構(濠跡、土塁の基礎、柱穴等)が確認できた。第3地区においては、古墳時代に属する溝状遺構、弥生時代中期の遺物包含層が確認された。この地区は、遺跡地名表に掲載されている下伊倉遺跡に括弧されると考えられる。第4地区においては、沖積作用による堆積土で遺構及び遺物包含層は確認できなかった。

2 土層

土層は第1地区、第2・3地区、第4地区でやや趣が異なっていた。

第1地区

第1層 表土で現耕作土である。

第2層 黄褐色粘質土層である。

第3層 暗青灰色粘質土層である。

第4層 明赤褐色土層で、上部の明赤褐色粘質土層(4a層)と下部のにぶい赤褐色砂質土層(4b層)とに細分できる。

第5層 黄褐色粘質土層である。

第6層 灰褐色粘質土層である。

第7層 暗灰色土層である。木の葉等の有機物を含む層と砂層とが互層をなしている。

第8層 灰白色砂層である。この層は透水層となっており、この地区での基盤層として取り扱った。

第2～3地区

- 第1層 表土で現耕作土である。第2地区では現耕作土（1a層）、城造成土（砂質で硬質）（1b層）、城造成土（やや軟質）（1c層）、黒色土（旧表土と考えられる）（1d層）に細分できる。
- 第2層 茶褐色土層である。この層は第2地区のみで観察され他地区では削平されている。
- 第3層 灰赤褐色火山灰土層である。開闢噴出物の暗紫ゴラに対比できる。
- 第4層 黒色土層である。一部削平されているところがある。
- 第5層 暗赤褐色土層である。黒色土に赤点粒子を含む層で、場所により赤褐色を呈する部分がある。
- 第6層 黒色土層である。弥生時代の遺物を包含している。
- 第7層 暗灰褐色土層である。弥生時代の遺物を包含している。
- 第8層 黒色粘質土層である。
- 第9層 黄褐色土層である。上部の黄褐色粘質土層（9a層）と下部の明黄褐色砂質土層（9b層）とに細分できる。この層は赤ホヤ火山灰に対比できる。
- 第10層 灰色粘質土層である。
- 第11層 灰褐色粘質土層である。
- 第12層 淡黄色土層である。上部の淡黄色粘土層（12a層）と下部の淡黄色軽石混土層（12b層）とに細分できる。
- 第13層 灰褐色土層である。上部の明褐色砂砾層（13a層）と灰色砂砾層（13b層）とに細分できる。
- 第14層 灰白色砂層である。この地区ではこの層を基盤層として取り扱った。

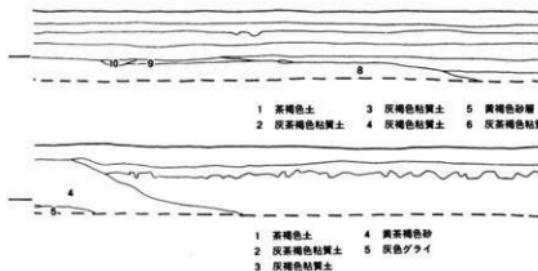
第4地区

この地区的土層は第2～3地区と色調はさほど変化はないものの、土の質は沖積作用による堆積ためか砂質の傾向にある。

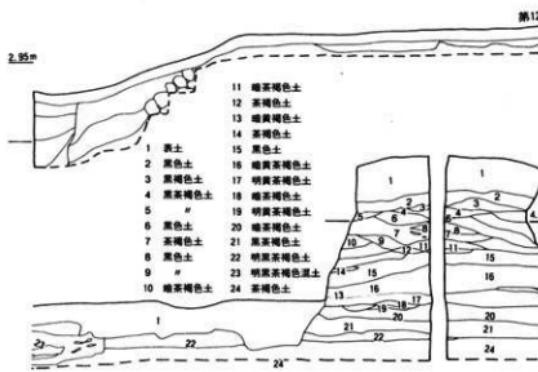
3 確認調査の結果

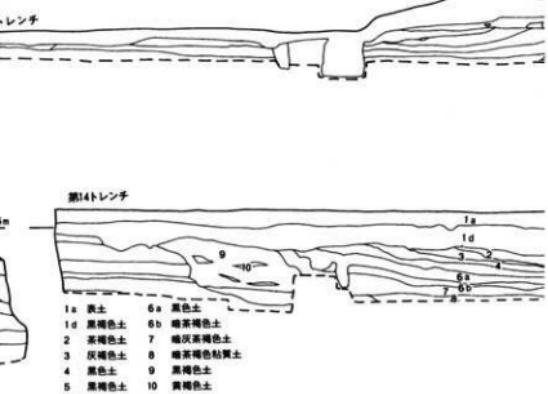
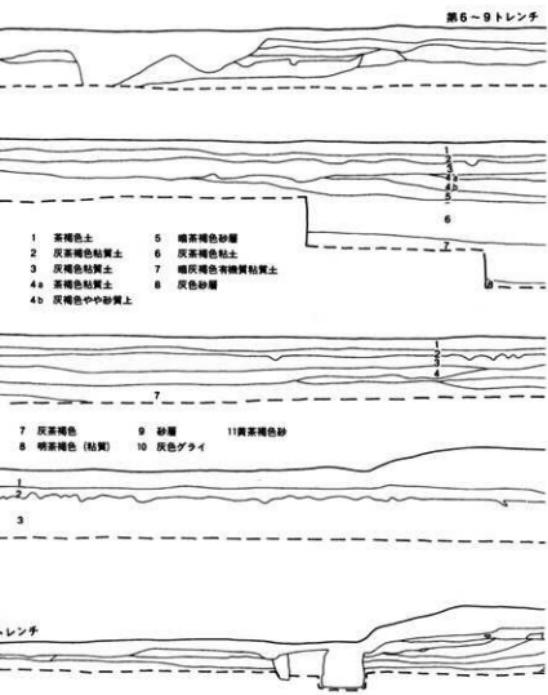
- 1 溝状遺構 第21-A、Bトレンチにおいて、第5層に掘り込まれた溝状遺構が3本確認された。幅0.9～2.1m、深さ約30cmを測るものである。埋土中からの遺物の出土がなかったため時期が確定できないが古墳時代以降のものと考えられる。
- 2 漆跡 下伊倉城跡に伴うものである。内堀が第9、12及び16トレンチにおいて法面が確認された。第9及び12トレンチでは幅約17cmを測る。深さは湧水のため確認できなかった。
- 3 土塁 下伊倉城に伴うものである。すでに調査対象区内の土塁は削平されてはいるが、第16トレンチで土塁の基礎と考えられるものが確認できた。

第4トレンチ

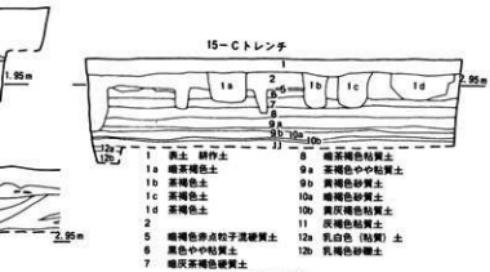
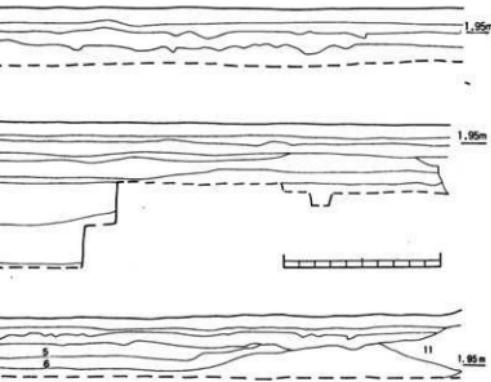


第12

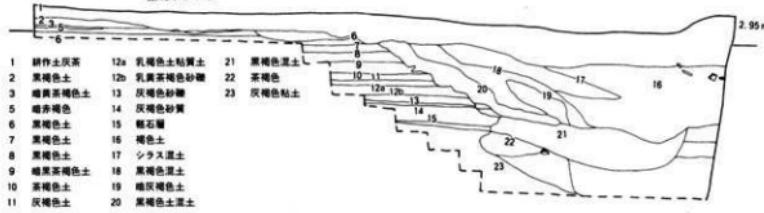




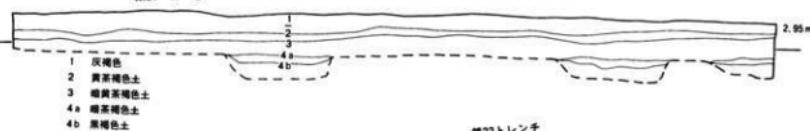
第4図 確認調査土層実測図（1）



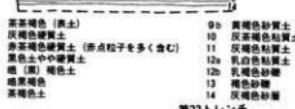
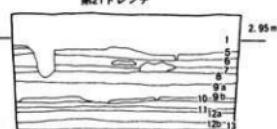
第16トレンチ



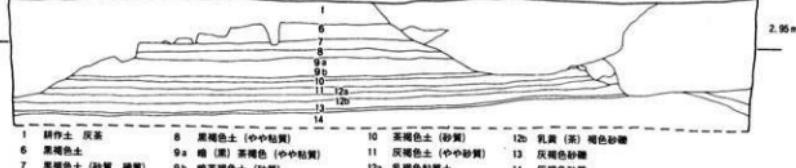
第21-A・B



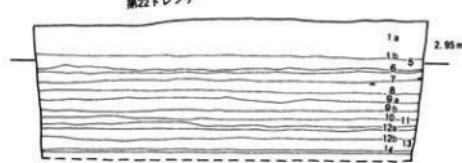
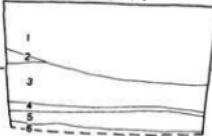
第21トレンチ



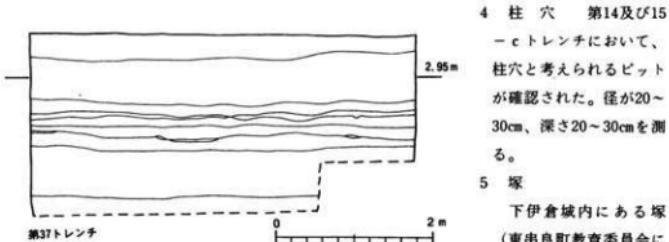
第23トレンチ



第24トレンチ



第5図 確認調査土層実測図 (2)



第6図 確認調査土層実測図（3）

指定外7号墳の標柱が立てられている。)は、人工によるものであることは確認できたが、時期については確認できなかった。

4 柱穴 第14及び15

—cトレンチにおいて、柱穴と考えられるビットが確認された。径が20~30cm、深さ20~30cmを測る。

5 塚

下伊倉城内にある塚
(東串良町教育委員会より唐仁古墳群139号墳、

第2節 緊急発掘調査の概要

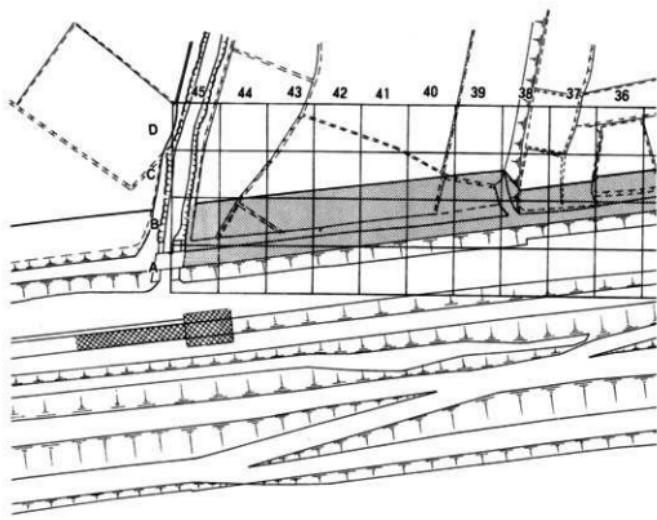
確認調査後、県文化課と河川課（鹿屋土木事務所）とで協議を行い緊急調査の対象となったのは、下伊倉城跡部分と弥生時代の遺物包含層が確認された地区（下伊倉遺跡）で新川西橋から高山町と東串良町との町境までの約450mの改修工事予定地域である。

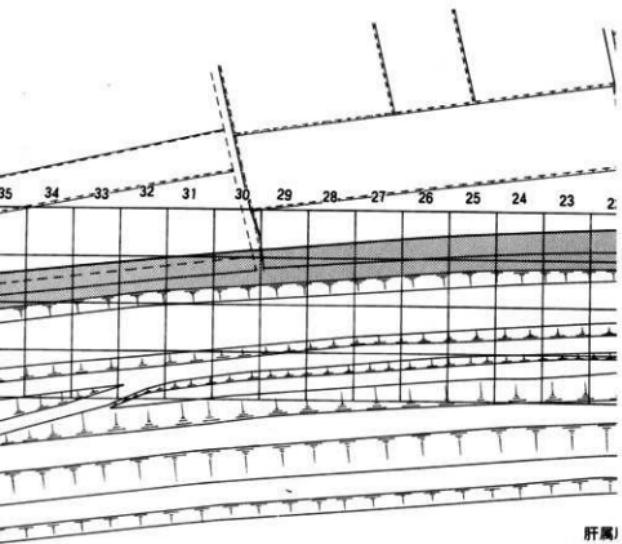
グリッドは、工事実施計画地域が大きくカーブしているため、任意に設定した。仮の基準点を下伊倉城内にある古石塔（C-18、19区）の東側2mのところに設定してグリッドを組んだ。

グリッドの基準線はN-23°-Eである。グリッドの呼称は北側からA、B、C、Dとし、高山町との町境の西側から1、2、3、とし、A-1区、B-2区と呼称することとした。

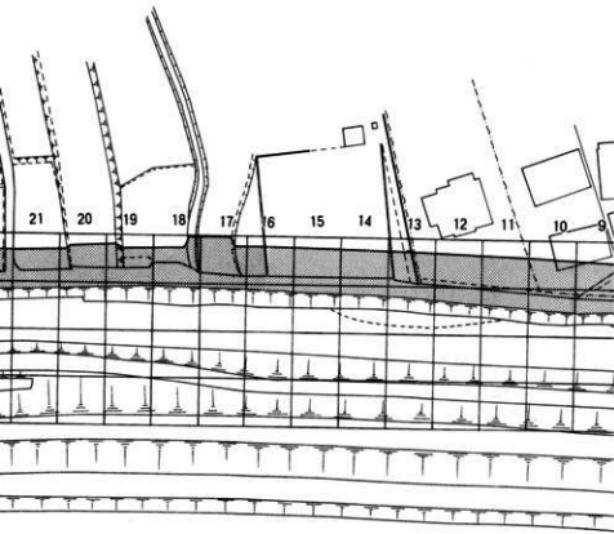
その結果、西地区的C、D-6~16区において第5層に堀り込まれた溝が3本、第7層に堀り込まれた溝が1本、第8層に堀り込まれた溝が1本と計5本の溝が検出され、第6~8層から弥生時代中期の土器片が出土した。東地区は下伊倉城跡にあたるところである。西側の内濠（C、D-17区）、外濠（C、D-19、20区）は現存しており、その深さは確認できたが、東側の濠（B、C-38、39区）は確認調査時と同様、水田開拓のためか検出できなかった。土壠は、予定範囲内においてはすでに削平されていた。土壠の基礎と考えられる部分もD-12区で一部観察されたのみである。B、C-30~38区の道路部分はすでに道路建設の際に遺構面よりも下位まで削平されていた。しかし、C、D-29、28区からはそれぞれ溝が1本ずつ計2本検出された。C、D-26、27及び23区からはビットが検出されたものの建物跡の想定はできなかった。C、D-23区では古道跡が1本、C-34区では井戸状遺構が1ヶ所検出された。B~D-35、36区の塚は土層観察等により古墳時代前後に構築されたものと推定される。

城跡の調査は、その全体からみれば確認調査的なものとなつたため、その全体像をつかむまではいたらなかった。

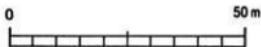
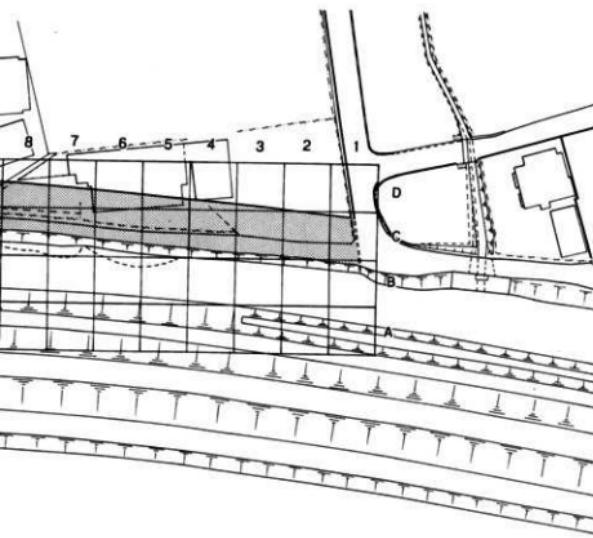




第7図 全面調査の結果

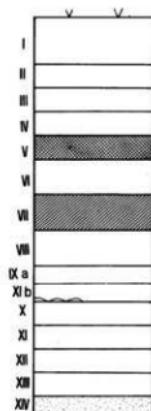


面及びグリッド図



第4章 土 層

下伊倉城跡及び下伊倉遺跡は、一級河川である肝属川の河口から約3.4km上流の右岸の小丘陵に立地しており、下層には白色砂層が存在している。土層は次のとおりである。



- 第Ⅰ層 暗赤褐色土層。耕作土
第Ⅱ層 黄褐色粘質土層。マンガンの沈澱がみられる。
第Ⅲ層 暗青灰色粘質土層。
第Ⅳ層 明赤褐色粘質土層(IV a)と、にぶい赤褐色砂質土層(IV b)層とに区分できる。

ただし、第Ⅱ層から第Ⅳ層は確認調査において、1地区(下伊倉城跡の東側低地部)で認められているが、今回面調査を実施した下伊倉遺跡及び下伊倉城跡では若干異なり次のようになる。

- 第Ⅱ層 茶褐色土層
第Ⅲ層 灰赤色火山灰層(暗紫ゴラ)
第Ⅳ層 黒色土層

第Ⅴ層 黒色土層。赤褐色の点状粒子が多量に混在し、硬くよく締まっている。

第8図 基本土層柱状

模式図

第VI層 黒色土層

第VII層 黑褐色土層。弥生時代の遺物包含層である。

第VIII層 黑褐色粘質土層。硬く締まっている。

第IXa層 黄褐色粘質土層

第IXb層 明黄褐色砂質土層。この下には部分的に砂質が強い部分がある(第Xc層)。

第X層 灰色粘質土層。水分を多く含んでいる。

第XI層 灰褐色粘質土層。水分を多く含んでいる。

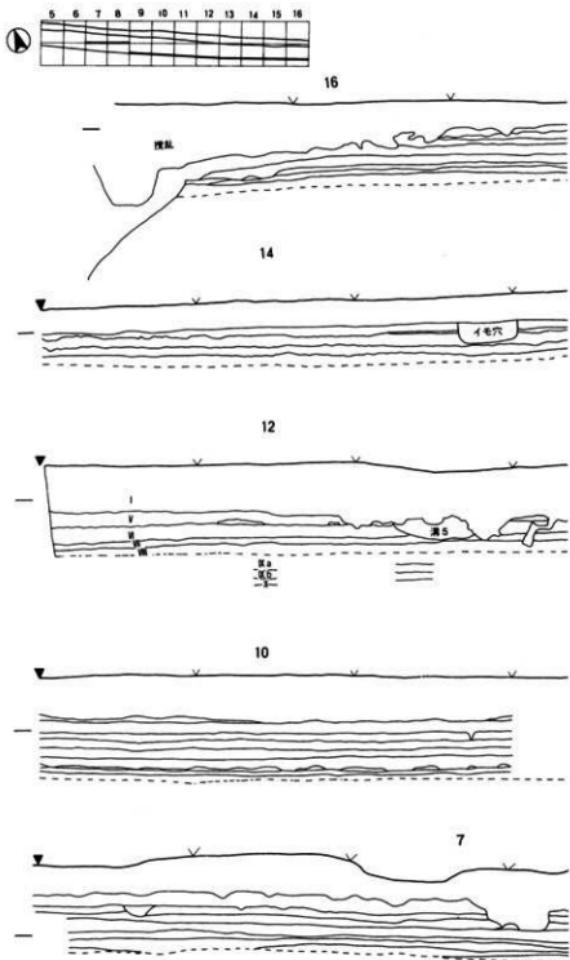
第XII層 淡黄色粘土層。下半は淡黄色軽石混土層(第XIIb)になる。

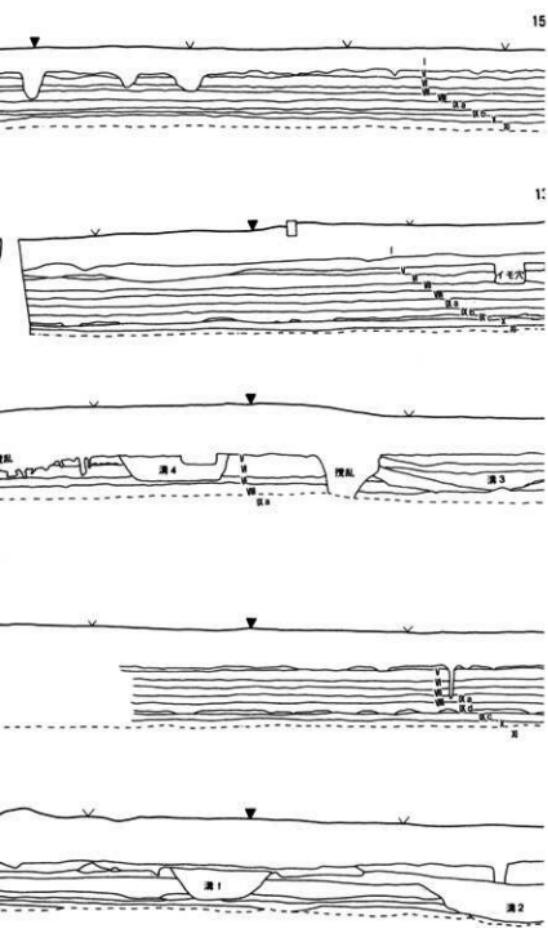
第XIII層 明褐色砂礫層。下半は灰色砂礫層(第XIIIb)に細分できる。

第XIV層 灰白色砂層

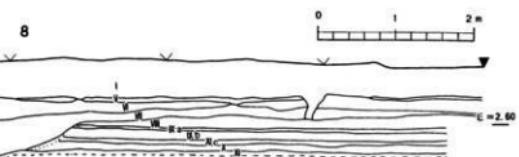
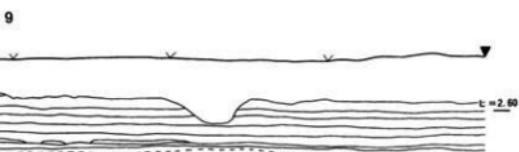
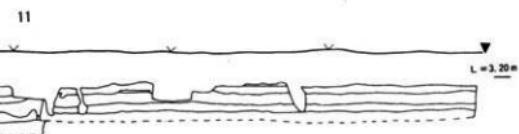
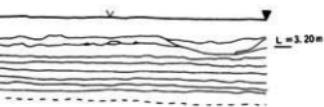
以上のような層位は、周辺部も含め順序立てているが、全面調査を実施した部分についてみると、下伊倉遺跡及び下伊倉城跡の土層の大部分は表土の下が第V層となっており、以下の層はほぼ同厚で、且つ、ほぼ水平に近い状態で堆積していた。

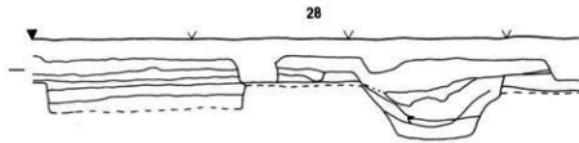
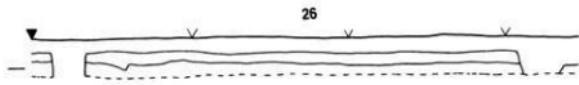
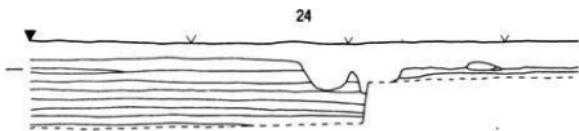
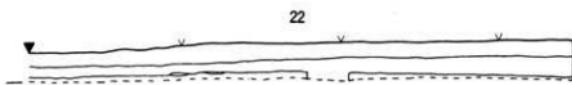
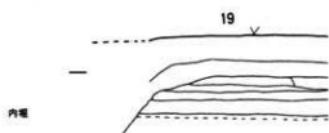
土層断面図は6・7区はC・D区の境を、8区から以降は調査区域の南側壁面を実測している。ただし、下伊倉城跡の濠の部分についてはその限りではない。第5章を参照されたい。

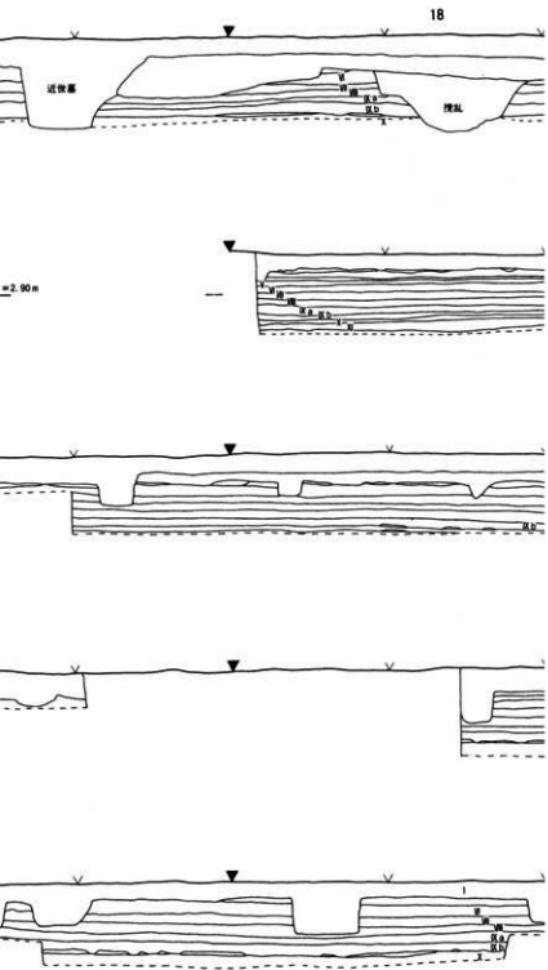




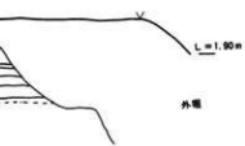
第9図 下伊倉遺跡土層断面図







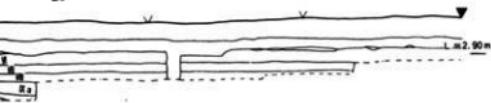
第10図 下伊倉城跡土層断面図(1)



21



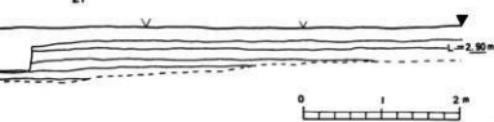
23



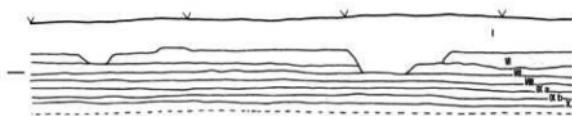
25



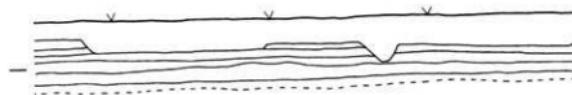
27



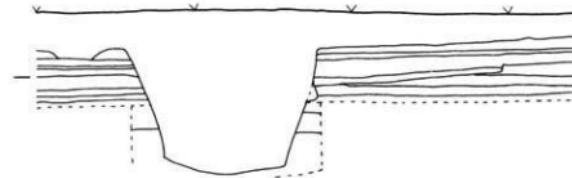
30

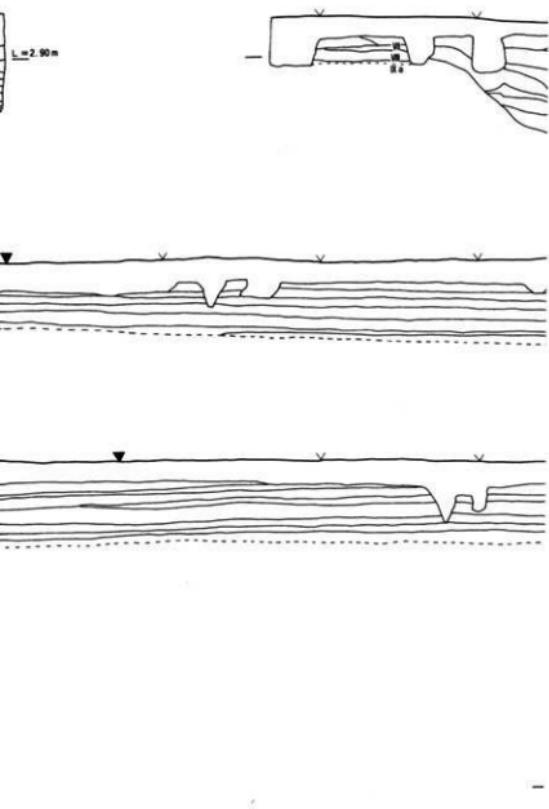


32



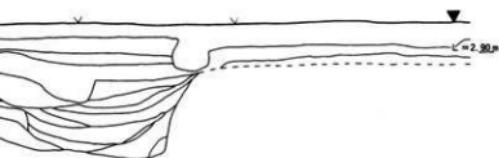
34



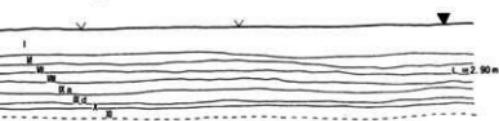


第11図 下伊倉城跡土層断面図(2)

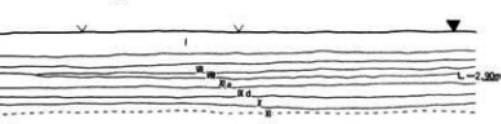
29



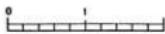
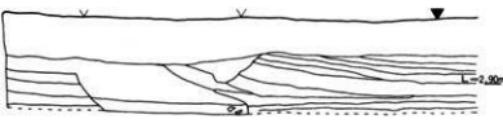
31



33



35







第12図 下伊倉城跡遺構配置図



第5章 下伊倉城跡の調査

第1節 調査の概要

実施した調査地は調査対象地区の東側に当たり、下伊倉城跡の城内部分である。西側の内濠（C、D-17区）、外濠（C、D-19、20区）は現存している。東側の濠（B、C-38、39区）は確認調査時と同様検出できなかった。土塁は予定範囲内においてはすでに削平されていた。土塁の基礎と考えられる部分もD-21区で一部観察されたのみである。B、C-30~38区の道路部分はすでに道路建設の際に造構面よりも下位まで削平されていた。しかし、C、D-29、28区からはそれぞれ溝が、1本ずつ計2本検出された。C、D-26、27及び23区からはピットが検出されたが建物跡の想定はできなかった。C、D-23区では古道跡が1本、C-34区では井戸状造構が1ヶ所検出された。B~D-35、36区の塚は土層観察等により古墳時代前後に構築されたものと考えられるものである。

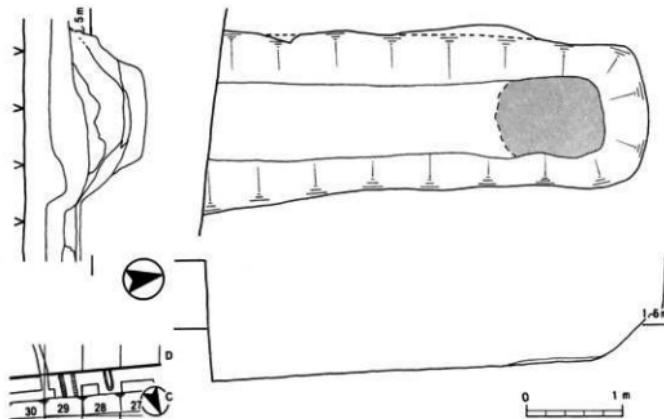
城跡の調査は、その全体からみれば確認調査的なものとなったため、その全体像をつかむまではいたらなかった。

第2節 歴史時代の造構

1 溝 1

C、D-28区で確認、検出されたものである。第V層前後まで城面の調整が行われ、第VI層から掘り込まれているものである。方向はほぼ南北で、北側部が端部となる。

幅1.5~1.8m、深さ0.5~0.7mを測り、断面は逆台形状を呈している。



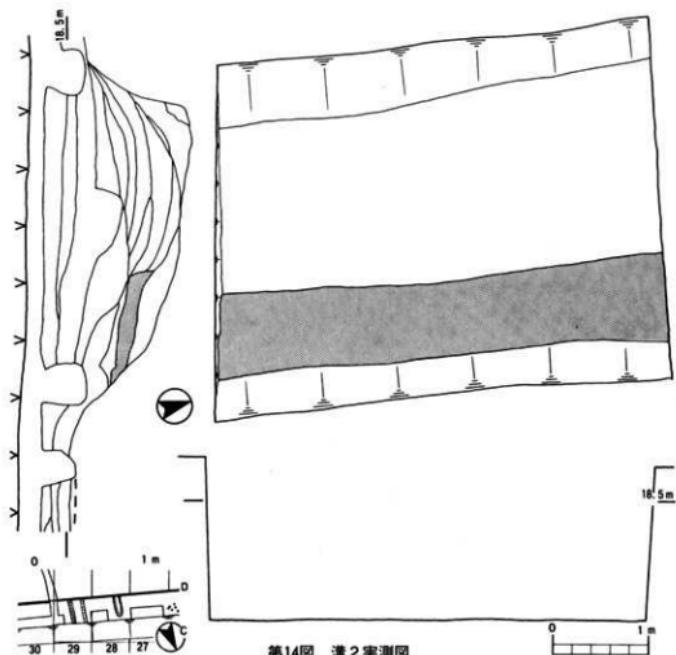
第13図 溝1実測図

床面は南側へ緩傾斜している。床面の北端部に、固く締まった部分がみられた。南側は調査地区外に延びており、その性格はつかめなかった。埋土中から少量の陶磁器片が出土した。

2 溝 2

D-29区で確認、検出されたものである。第V層前後まで底面の調整が行われ、第VI層から堀り込まれているものである。方向はほぼ南北にとる。

幅3.7m、深さ0.5~0.7mを測り、断面は逆台形状を呈していて、床面は西側へ傾斜している。溝の中位の東側には通路と想定される固く締まった部分がある。この表面には、水成作用によると考えられる薄い砂層が観察された。埋土中からは少量の陶磁器片の他、火熱を受けたと考えられる軽石や花崗岩片が出土した。溝は北、南へそれぞれ延びているが、南は地区外、北側は川の開析で破壊されているため、その性格はつかめなかった。



第14図 溝2実測図

3 ピット群1

D-23区において4個確認、検出されたものである。ピットは第I b層から掘り込まれていたものと考えられるが、埋土と第I b層との色調が酷似していたため第VI層上面で確認、検出された。

径19~20cm、深さ19~27cmを測るものである。ピット2からは茶釜の破片が出土した。これらのピットからは建物跡を想定することはできなかった。

第3表 ピット群1計測表

ピットNo	径(cm)	深さ(cm)	ピット間の距離(cm)
P 1	2 0	1 9	P 1-P 2
P 2	1 9	1 7	P 2-P 3
P 3	1 9	2 7	P 3-P 4
P 4	2 0	2 0	P 4-P 1

4 ピット群2

C、D-26、27区において6個確認、検出されたものである。第V層前後までの城面の調整が行われ、ピットと第I b層から掘り込まれていたものと考えられるが、埋土と第I b層の色調が酷似していたため第VI層上面で確認、検出された。

径18~32cm、深さ11~33cmを測る。ピット6からは根石状のものが2個出土した。これらのピットからは建物跡を想定することはできなかった。

第4表 ピット群2計測表

ピットNo	径(cm)	深さ(cm)	ピット間の距離(cm)
P 1	2 0	1 6.5	P 1-P 2
P 2	2 0	2 5.5	P 2-P 3
P 3	2 0	1 1	P 3-P 4
P 4	3 2	3 3	P 4-P 1
P 5	1 8	2 3.5	P 3-P 4
P 6	2 2	2 0.5	P 4-P 1

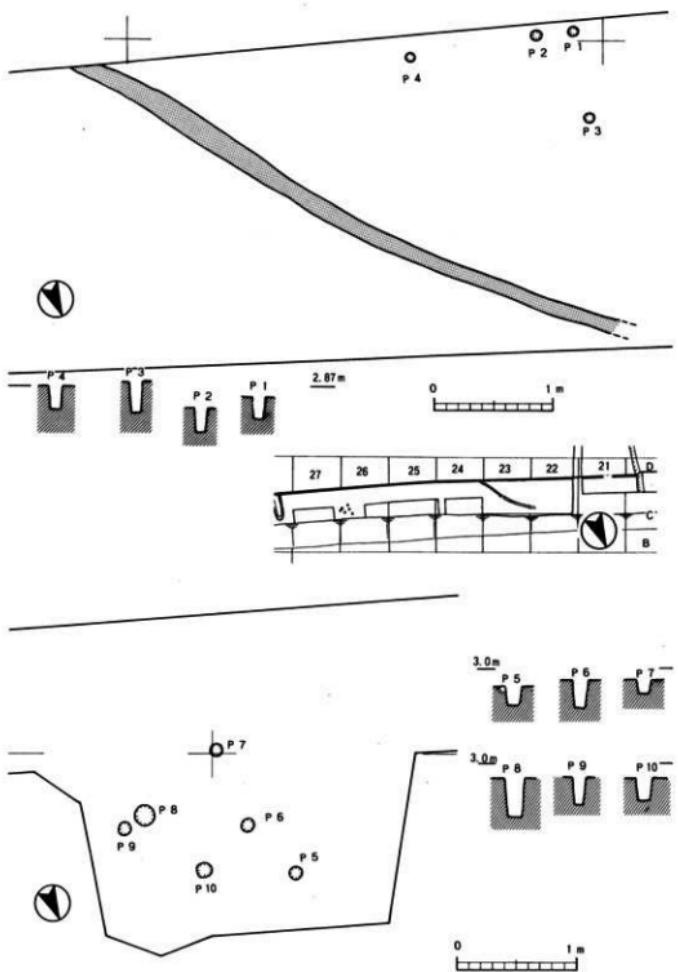
5 古道

C、D-23区において確認、検出されたものである。第VI層上部まで城面の調整が行われ、第VI層上面で第V層が一部固く縮まっている。南東から北西の方向を示し、南東部は地区外へ延びる。北西部は削平ないしは擾乱のため消失している。

幅23~50cmを測るが、50cm前後あったものと考えられる。城の造成面での検出ではあったが、古道の上部及び周囲からの遺物の出土はなかった。このため、古道の明確な時期については不明である。

6 井戸状遺構

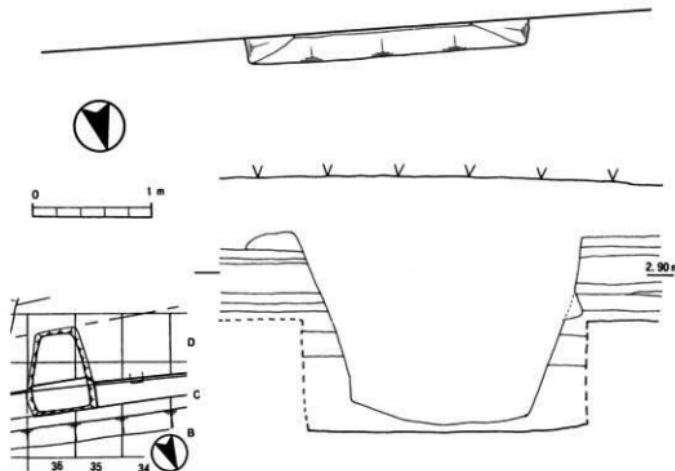
C-34区において確認、検出されたものである。第VI層まで城面の調整が行われ、第I b層



第15図 ピット群及び古道実測図

から掘り込まれている。遺構のほんの一部が確認、検出されたもので、その大半は地区外である。平面形は方形ないしは長方形をなしているものと推定される。

一辺は2.35mを測るもので、断面は逆台形状を呈している。床面は基盤層の白色砂層まで達しているが、湧水面までは達していないため、井戸としての機能は持っていないものと考えられる。



第16図 井戸状遺構実測図

7 濶

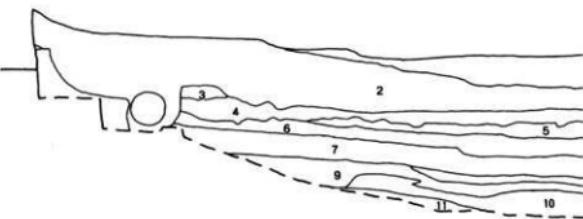
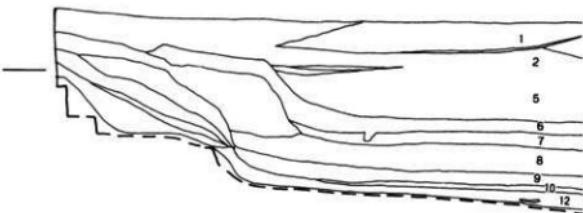
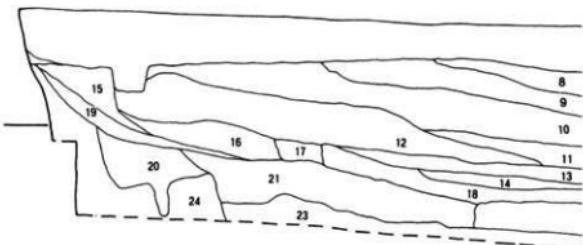
1) 西側外濠

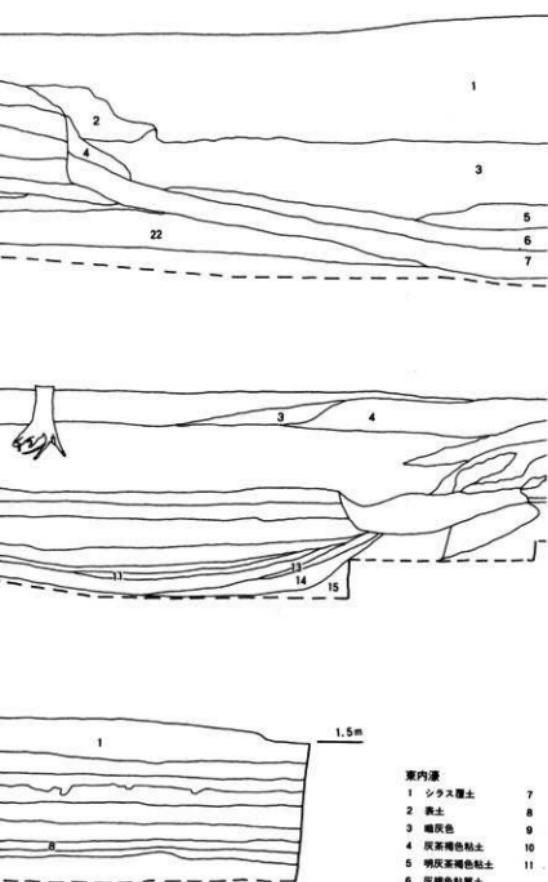
西側外濠はD-17区以南に現存しているもので、現存幅は約11mを測る。

調査の結果、幅約20mを測る旧河川状のものを利用して、幅13m、深さ2.6mの濠を構築していることが確認された。埋土は下部では砂層であるが、上部は後に水田として利用されていたため粘質土がグライ化している。濠の最下部は湧水面の層と同じレベルである。

2) 西側内濠

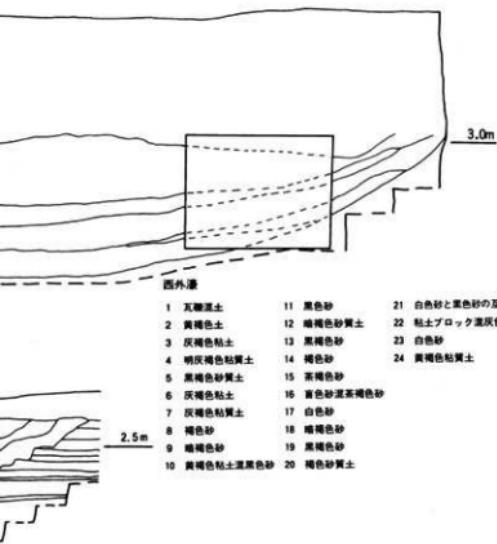
西側内濠もD-19、20区以南に現存しており、一部は埋め立てられているもので、現存幅約12mを測る。





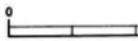
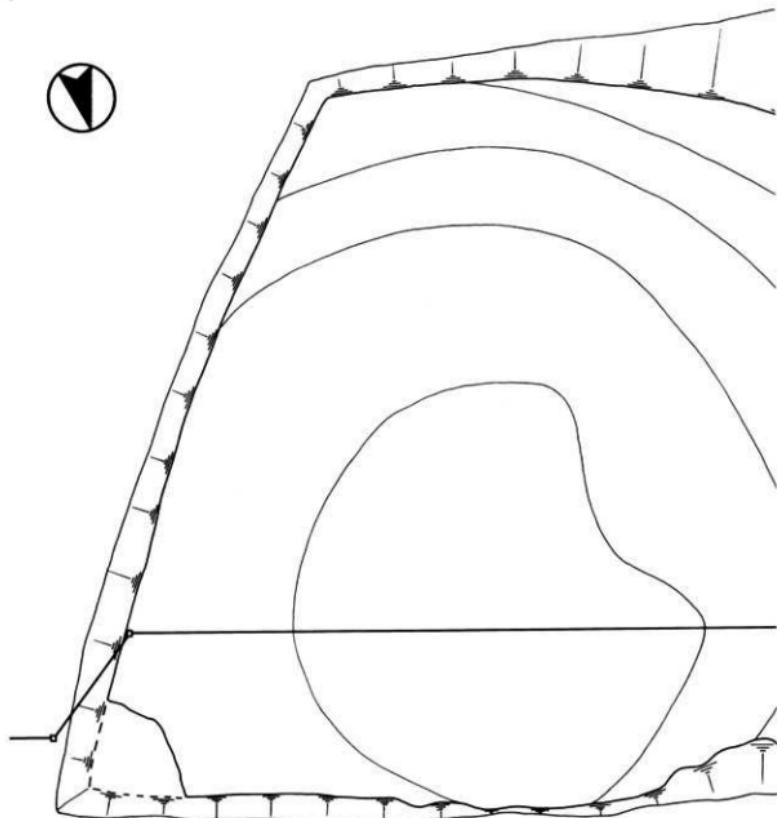
第17図 濃土層実測図

東内源	
1 シラス層土	7
2 粘土	8
3 鮎灰色	9
4 深紫褐色粘土	10
5 明灰茶褐色粘土	11
6 灰褐色粘質土	

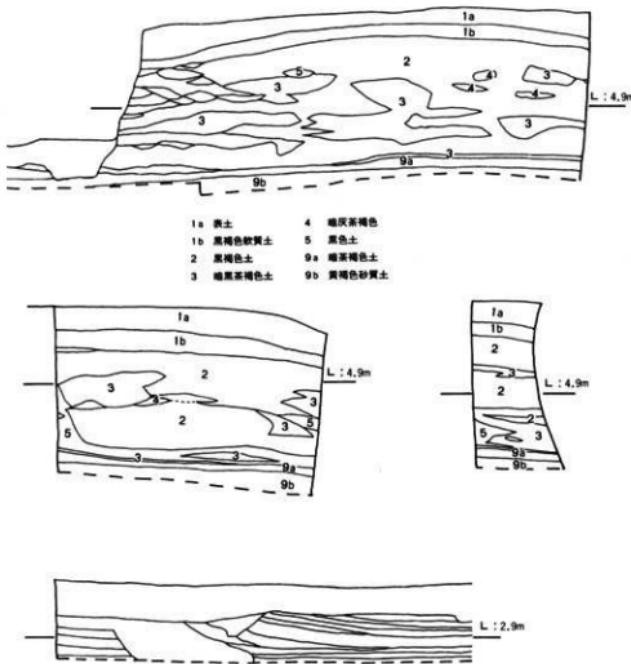
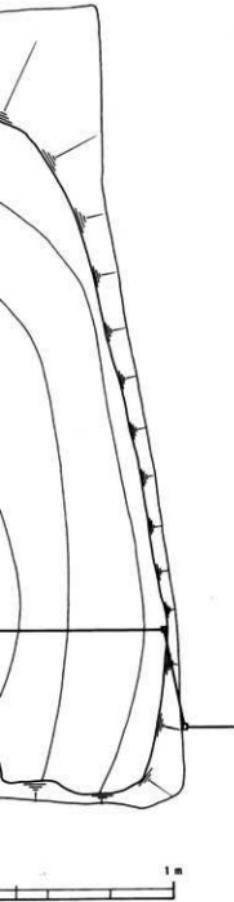


西外層
 1 シラス層土
 2 異植物
 3 黑褐色土
 4 明茶褐色土
 5 暗灰褐色土
 6 暗灰褐色土
 7 暗褐色砂
 8 茶褐色砂
 9 明灰褐色砂
 10 茶褐色砂
 11 明灰褐色粘土
 12 反褐色粘土
 13 明灰褐色土
 14 黑褐色砂
 15 白色砂
 16 青色砂混茶褐色砂
 17 白色砂
 18 暗褐色砂
 19 黑褐色砂
 20 褐色砂质土

(褐色砂质土
 (褐色砂质土
 (褐色砂
 (灰褐色粘质土
 (灰褐色砂



第18[



塚実測図

調査の結果、濠の一部は埋められていたものの、幅15.4m、深さ2.9mを測るものであることが確認された。濠の最下部は湧水面と同じレベルである。

3) 東側内濠

B、C-38区以東に存在すると想定されるものであるが、確認調査時に西側法面のみ確認できたものであり、緊急発掘調査でも同様であった。

調査の結果、法面角度は約15度で東へ掘り込まれている。最下部は湧水面と同じレベルである。埋土は下部で砂層であるが、上部は後に水田として利用されているため粘質土がグライ化している。

4) 東側外濠

B、C-38区以東に存在すると想定されるものであるが、確認調査及び緊急発掘調査時でも確認できなかった。

第3節 その他の遺構

塚

B～D-35、36区に現存しているものである。工事予定地区内について調査を行った。この塚は、東串良町教育委員会によって唐仁古墳群139号墳指定外7号墳の標柱が立てられている。以前は円形を呈していたものと考えられるが、現存の平面形は畠地拡張や河川改修に伴う道路開削等により台形状を呈し、現況では南北約12.1m、南側約9m、北側約14.3m、高さ約2.2mを測る。

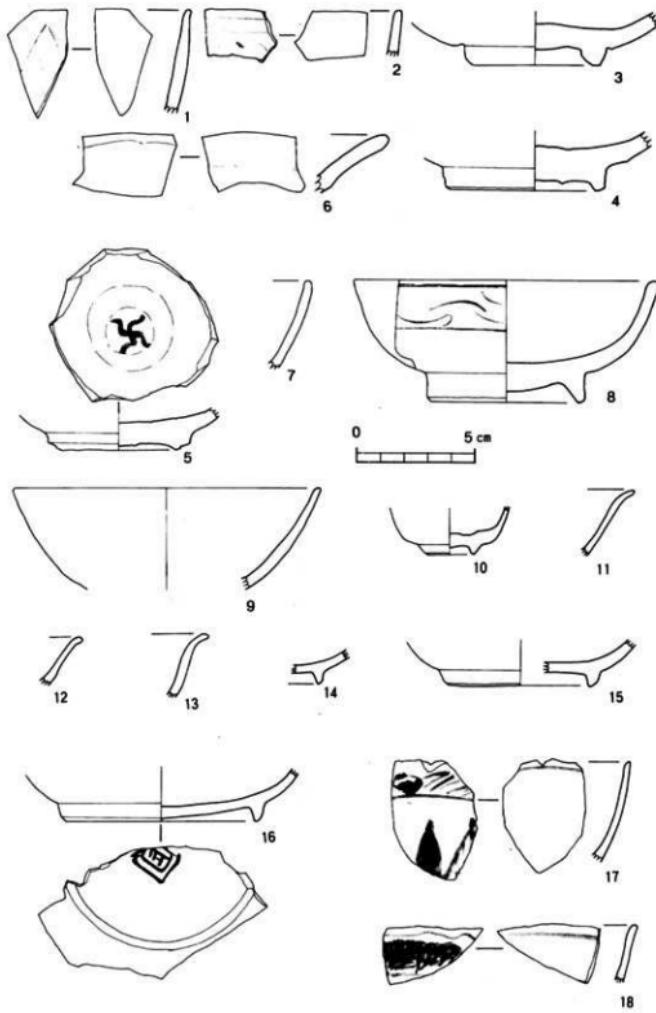
塚の西側における断面で、2.3mの幅で粘質の第Ⅵ～Ⅶ層の部分を掘り上げて、版築状に構築していることが判明したが、古墳時代前後明確な構築の年代は判明しなかった。

第4節 歴史時代の遺物

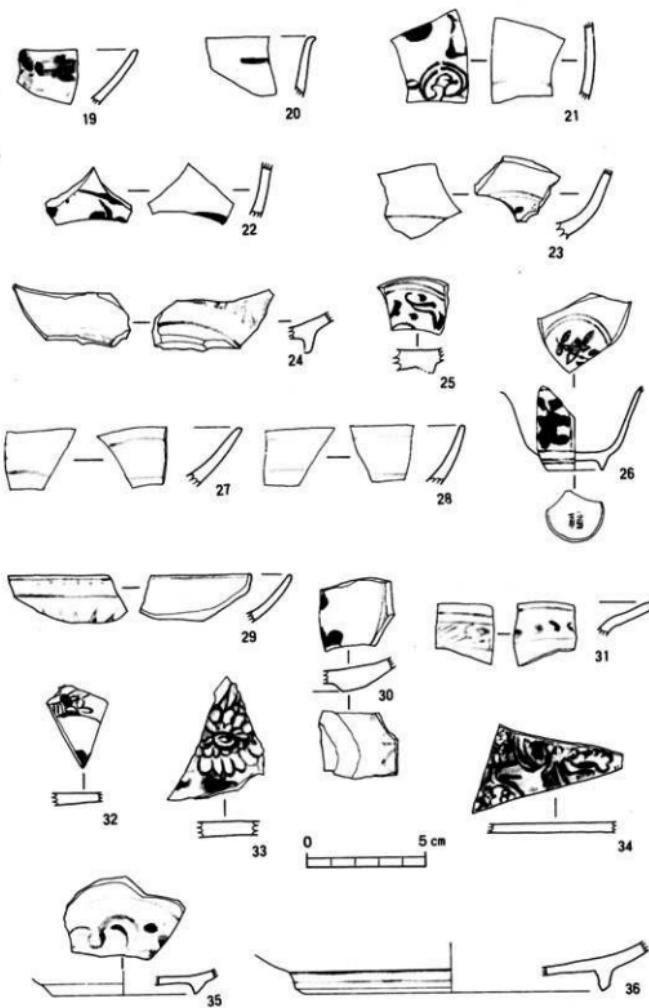
1～53が歴史時代の遺物である。出土した箇所は溝2と表土である。

1 青 磁

青磁は碗と後花皿である。すべて表土からの出土である。1、2が碗の口縁部片、3～5が碗の底部片である。1は碗の口縁部片である。口縁部はわずかに外反する。外面には広幅の鶴連弁文を施している。色調は灰緑色を呈する。2は口縁上部に沈線を施し、連弁幅がやや狭く、花弁がやや不揃いのものである。口唇部は若干球線状となっている。色調は灰緑色を呈し、口唇部では一部茶褐色を呈する。3は高台付近で土見せを行っている。高台はヘラ削り出しである。火熱が強かったためか、土見せ部分は暗赤茶褐色を呈する。4は高台の疊付け付近まで釉が掛かる。見込み中央には「辻」文を陽刻している。高台はヘラ削り出しである。色調は暗灰緑色を呈している。5は高台疊付け付近の一部で土見せを行っている。高台はヘラ削り出しである。焼成が不完全なためか、上釉は灰白色、胎土は明茶褐色を呈する。6は口縁部から腰部にかけての後花皿の破片である。口縁部は緩やかなカーブで後花を作り出している。口縁内面には沈線を陰刻している。色調灰緑色を呈している。



第19図 歴史時代の出土遺物（1）



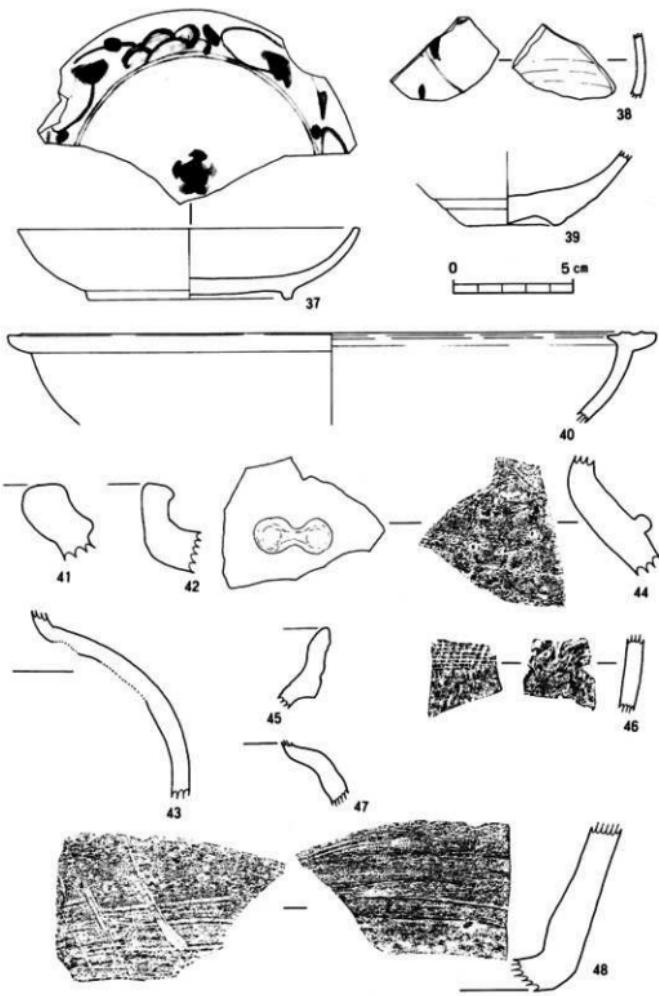
第20図 歴史時代の出土遺物（2）

2 白磁

白磁は碗と皿である。表土と溝2の埋土からの出土である。7~10が碗で、10は小型のものである。7はやや薄手に作られたもので、外面に水挽痕が残る。焼成が不完全なためか、色調は灰青色を呈する。口唇部では釉が剥落している。8は口縁部がやや直口気味のもので、復元口縁径12.9cm、復元器高5.2cm、復元高台径6.7cmを測る。外面は口縁部に2状の沈線とその沈線間に唐草文様を陰刻している。見込みには圈線状のものが陰刻されている。9は薄手の碗形のもので、復元口縁径は13cmを測る。外面に水挽痕が若干残る。色調は灰白色を呈する。10は高台径2cmを測る小型小杯である。見込みには重ね焼きのため釉を搔きとっている。色調は白色を呈する。11~13は端反形の皿の口縁部片である。14~16は皿の底部片である。15の復元高台径が6.5cm、16が8.5cmを測る。16の高台内には呉須で幾何文が描かれている。色調は13、15が不純物のためか黒い斑点がみられる。11が灰白色、他は白色を呈する。

3 染付

染付は碗、皿、瓶である。すべて表土中からの出土である。17は碗形を呈し口縁部に幾何文、胴部から腰部にかけて蕉葉文が描かれている。18は口縁部が若干端反り、口縁部に幾何文が描かれている。17、18の口縁部には圈線が1条描かれている。17には粗い貫入がはいる。色調は17はやや灰色味を帯び、18はやや青味を帯びる。19はやや直線的に聞く口縁部片である。外面に草花文が描く。20は端反りの口縁部片であり、横線を薄い呉須で描いたものである。21、22は草花文が描かれた胴部片がある。23は腰部の破片で、見込みに草花文が描かれたものである。24は胴部に蕉葉文が描かれた底部片である。高台に圈線を2条、見込みにも文様が描かれているが詳細は不明である。25は見込みに吉祥文の人形寿字文が描かれた底部片である。高台際に圈線が1条描かれている。やや粗い貫入がみられる。26は端反りの小杯である。胴部に区画が施され、草花文が描かれている。高台際に2条の圈線が描かれている。見込みには2条の圈線が描かれ、中央に草花文が描かれている。また高台内には「福」字が描かれている。27~30は基筒底を有する皿の口縁部片である。27、28は内外面に2条の圈線が描いてある。色調はやや緑味を帯びている。また、やや粗い貫入もみられる。29は外面の口縁部に波文を、胴部に蕉葉文が描いてある。内面には口縁部に1条、見込みに2条圈線が描かれ、幾何文が配してある。30は底部片である。底部近くに蕉葉文が描かれている。底部近くは無釉である。見込みには草花文が描いてある。色調は燃焼が不完全なためか、上釉が白濁している。31は菱花皿の口縁部片である。口縁部内面には波文を、外面には連点文が描いてある。32は見込みに草花文が描かれた底部片である。粗い貫入が入る。33は見込みに菊花文が描かれた底部片である。焼成、発色共に良い。34は飛龍文ないし玉取り獅子文が描かれたものと考えられる底部片である。見込みの上釉は細かな発泡がみられる。35は復元底部形6.2cmを測る。玉取り獅子が描かれた底部片である。焼成が不完全なためか、胎土はやや吸水性があり、色調は白濁しており、高台内では釉が完全に溶融していない。36は復元底部形13.2cmを測るものである。焼成が不完全で白濁していて文様等は不明である。37はくらわんか手のものであると考えられる。復元口径14.4cm、



第21図 歴史時代の出土遺物（3）

器高3cm、復元底部形8.6cmを測るものである。

4 陶 器

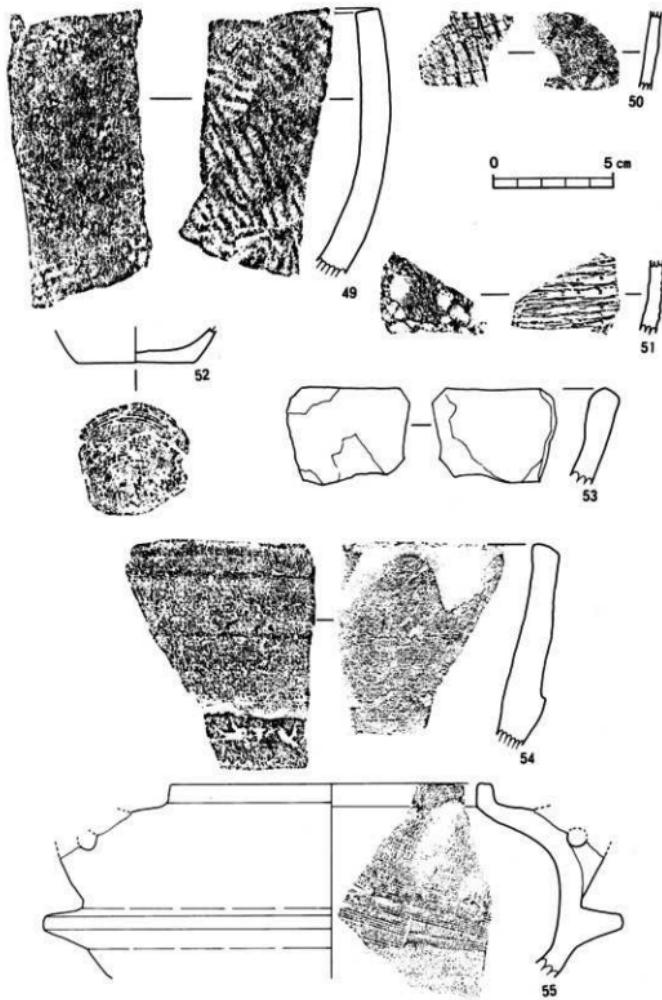
陶器は、碗、鉢、甕、壺、櫃体等である。すべて表土中からの出土である。39は唐津焼き碗の底部片で、高台径3.8cmを測る。緑灰色の釉を薄くかけたもので、底部近くは土見せが行われている。見込みには目土が3ヶ所見られる。高台はヘラ削り出して、片高台である。胎土は砂粒を多く含む。40は復元口縁径27.6cmを測る鉢の口縁部片である。無釉であるが、胎土には鉄分を多く含むためか、吹き出し釉が斑点状に見られる。口唇部はほぼ水平で凹線が2条めぐり、内側は稜線状となる。色調は暗茶褐色を呈する。41は甕の口縁部片である。頸部に1条の凸帯をめぐらされ、それ以下に暗緑色の釉が内外にかけられている。凸帯以上の口縁部は無釉である。胎土に小礫を含む。42は備前焼の壺の口縁部片である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部は玉縁状となる。無釉であるが、頸部に自然釉がかかっている。内外面の色調は暗茶褐色を呈する。43はやや薄手の耳付き壺の肩部片である。外面に水挽痕を残し、内面には剥落がみられる。色調は暗茶褐色を呈する。44はやや厚手の耳付き壺の肩部片である。肩部にくらべ口縁部は薄く、やや直口気味である。色調は外面暗褐色、内面灰色を呈する。無釉であるが、自然釉が薄くかかっている。45は備前焼櫃鉢の口縁部片である。口縁はほぼ垂直に立ち上がるものの、3条の凹線がめぐらされている。口縁部下は稜線状となる。無釉であるが、自然釉がかかる。色調は暗茶褐色を呈する。46は胴部破片である。外面に横位の櫛描文を残し、内面には同心円印を残している。無釉であるが、自然釉が一部にかかっている。内面は無釉で、黒褐色を呈する。48は甕の底部片である。内外面には擦痕を残す。色調は外面茶褐色、内面灰色を、断面では茶褐色を呈する。49は鉢の口縁部片である。焼成が不完全なため須恵質を呈す。内外面に叩き痕が残っている。色調は赤褐色を呈する。

5 須恵器

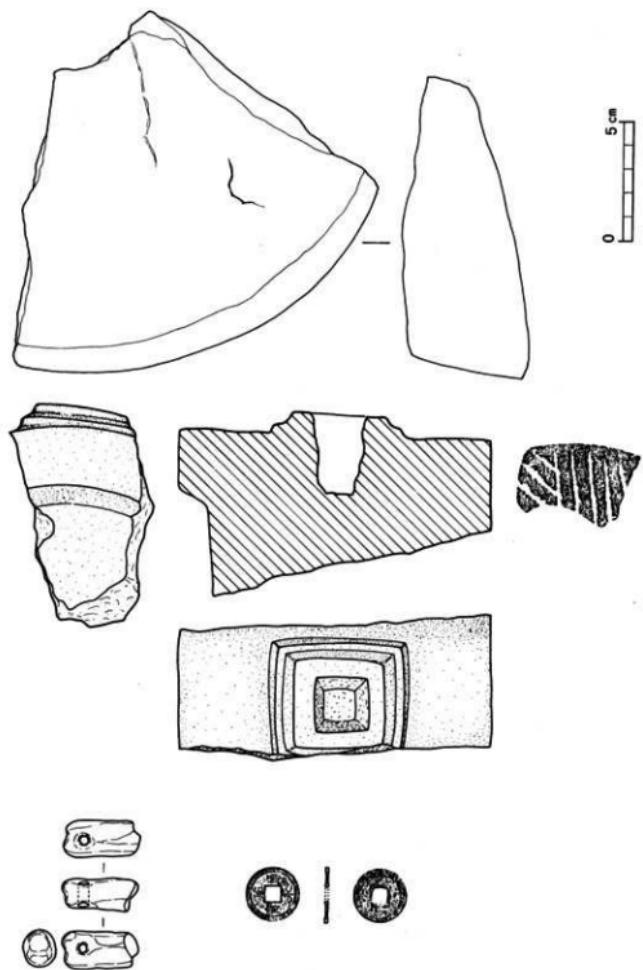
50、51は須恵器片である。50の外面は格子叩き、内面は同心円印が残っている。51は外面が平行叩きである。内面は剥落している。共に暗灰色を呈する。

6 土師器

52は土師器皿である。灯明皿としての利用が考えられる。底部径4.9cmを測る。底部は糸切り底である。色調は茶褐色を呈する。53は土師器の鉢ないし盤の口縁部片である。口縁は直口気味で口唇部に向かってやや厚くなる。色調は茶褐色を呈する。54は甕の口縁部片である。やや内湾気味に開く。外面には横位のハケ調整が施されており、ススの付着がみられる。色調は外面が黒褐色、内面茶褐色を呈する。



第22図 下伊倉城跡の出土遺物（4）



第23図 下伊倉城跡の出土遺物（5）

7 瓦 器

55は瓦器質の羽釜の破片である。復元口縁径13.6cmを測り、高さ0.8cmの口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部は平坦となる。胴部には幅1.8cmの鉤状の凸帯が巡らされている。肩部には取っ手が付いている。

8 その他の遺物

56は土師質の双孔棒状土錘の破片である。直径1.4cmの円柱状の端部に径4mmの孔をもつものである。57は古錢である。径2.3cmを測る「寛永通寶」である。58は茶臼である。下伊倉城内からの表採遺物である。59は石臼の破片である。下伊倉城内での表採遺物である。上臼（雌臼）であり、下面には副溝が刻まれ、側面には方形の挽手の穴（一辺2.4cm、奥行き3.3cm）がある。砂岩製で丁寧な調整がみられる。60は五輪等の水輪の一部である。凝灰岩製である。塚の上部で採集したものである。大きさは不明である。

第5節 小 結

鹿児島県内における中世城館跡の考古学的な調査は諸開発等にともなって、昭和50年代頃から行われるようになった。加栗山遺跡（川上城跡¹¹）、上ノ城跡²¹、村原（梅ノ原）遺跡（尾守ヶ城跡²¹）、平泉城跡⁴¹、中尾田遺跡（片城跡の一部⁵¹）、遍城跡⁶¹、苦辛城跡⁷¹、平山城跡⁸¹、鹿児島（鶴丸）城本丸跡⁹¹、城山山頂遺跡、横川城跡¹¹等である。

今回の調査は一級河川肝属川の支流である波見川及び和田川の河川改修に伴う調査であった。このため、60,000m²の広さをしめる下伊倉城跡のうち調査を実施したのは全体からみてわずかなものである。

遺構について

遺構は溝、ピット、古道、濠、塚、井戸状遺構等が確認検出された。溝1は通路ないし排水溝としての性格も考えられるが一部だけの調査のため不明である。溝2は溝1と較べてやや大きく深いため曲輪を分ける空堀状のものの性格が考えられるものである。ピットは建物跡を想定できる検出の状況ではなかった。古道は城面での検出ではあったが、明確な時期を把握するまでにはいたらなかった。濠は西側外濠が旧河川を利用して構築したものであることが確認できた。しかし、東側の濠については後世に水田として開発、利用されているため濠の法面は内濠の西側法面のみであった。井戸状遺構は湧水面までの掘り込みではなかったため、ある種の軍事施設や貯蔵施設等のものを考えねばならないだろう。塚は古墳としての可能性が強いものであるが、今後の再調査がまたれる。

遺物について

遺物の出土量もさほど多くはなかったが各種のものがある。出土遺物の種類は青磁、白磁、染付、備前焼、土師器、羽釜等である。これらのうちあるものは中国からのものもある。日本産のものでは備前焼き等の県外産のものもある。時期を知るものは青磁、白磁、備前焼の摺り

鉢であろう。青磁では鎬蓮弁文のものが14世紀頃のもの、棱花皿及び白磁の皿が15世紀後半から16世紀の年代が考えられている。¹²⁾染付等でも蕉葉文、人形壽字文等が見られ幕底等の器形から16世紀の年代が考えられる。備前焼鉢も口縁部が長く肥厚するものであり、備前焼鉢の編年¹³⁾のIV～V期に属し、南北朝から江戸時代初期の年代が考えられる。

以上のことから、一部14世紀のものが含まれるが、主体は16世紀のものである。下伊倉城の築状時期については文献等の資料が少ないためはっきりしないが、この時期に利用されていたことは把握できるものである。なお、城内にある古石塔の銘にある永錄9年はこの付近一帯に勢力をもっていた肝付氏が島津氏との争いにより肝付氏の居城である高山城が落城した年である。下伊倉城跡からの焼けた軽石の出土等から肝付氏の勢力傘下にあって落城したものであろうことが考えられる。

また、下伊倉城の旧態は高山總絵図（高山町立歴史民俗館所蔵）をみると大きく蛇行した肝属川が描かれており、今に残る二重の濠と併せて三重に囲まれた鹿児島県下においては数少ない平城である。

今回の調査は、全体に対して一部の調査であり、確認調査的なものであったためその全体像を把握するまでには至らなかったが、これを契機にこの城に対する研究が進んでいくものと考える。

参考文献

- 1) 鹿児島県教育委員会 「加栗山遺跡」 鹿県埋文報(16) 1981
- 2) 加世田市教育委員会 「上ノ城遺跡」 加世田市埋文報(2) 1980
- 3) " 「村原(梅ノ原)遺跡」 加世田市埋文報(1) 1977
- 4) 大口市教育委員会 「平泉城跡」 大口市埋文報(1) 1982
- 5) 鹿児島県教育委員会 「中尾田遺跡」 鹿県埋文報(15) 1981
- 6) 河口貞徳、本田道輝 「廻城」 1984
- 7) 鹿児島県教育委員会 「苦辛城跡」 鹿県埋文報(27) 1983
- 8) 川辺町教育委員会 「平山城跡」 川辺町埋文報(1) 1984
- 9) 鹿児島県教育委員会 「鹿児島(鶴丸)坂本丸跡」 鹿県埋文報(26) 1983
- 10) 国分市教育委員会 「城山山頂遺跡」 国分市埋文報(2) 1985
- 11) 横川町教育委員会 「横川城跡」 横川町埋文報(1) 1987
- 12) 大橋康二 「15・16世紀における日本出土の青花磁に関する編年試案(11)」 白水8
1981
- 13) 伊東晃他 「焼締古陶の雄」 日本陶磁全集10 1977

第6章 下伊倉遺跡の調査

第1節 下伊倉遺跡の概要

前年度の確認調査で弥生時代の遺物包含層が検出されたC、D - 5区から16区までの範囲について緊急発掘調査を実施した。調査地は、現に使われている農道とこれに平行する拡幅計画地部分からなるが、初めに、現農道南側の拡幅計画地部分から調査を開始した。その後、農道部分の調査に移った。

グリットは10mを一区画としているが、調査範囲がカーブしており、C区とD区を区別して呼称することは、当該調査ではさほど意味をなさないところから、下伊倉遺跡の調査区は東西の5~18区というグリット呼称で記述することにする。

下伊倉遺跡の層位は第4章で述べたように、表層の下は第V層であり第Ⅵ~Ⅳ層はない。第V層上面では歴史時代の溝状遺構が四本検出された。弥生時代の遺物は第VII層を主体として、ほぼ全面に確認された。遺物は2ヶ所の集中部が認められた。また弥生時代の溝状遺構が二本検出され、その1つからは土器片が多量に出土した。

今回調査を実施した部分は敵高地の縁辺部にあたるわずかな面積であり、遺跡の主要部は南側に広がると推定される。

第2節 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構として溝状遺構が二本検出された。両者は共に調査区域の西側で8区に隣接して検出された。またわずかではあるが、南側で切り合っている状況が確認され、若干の時期差を有しているものと考える。

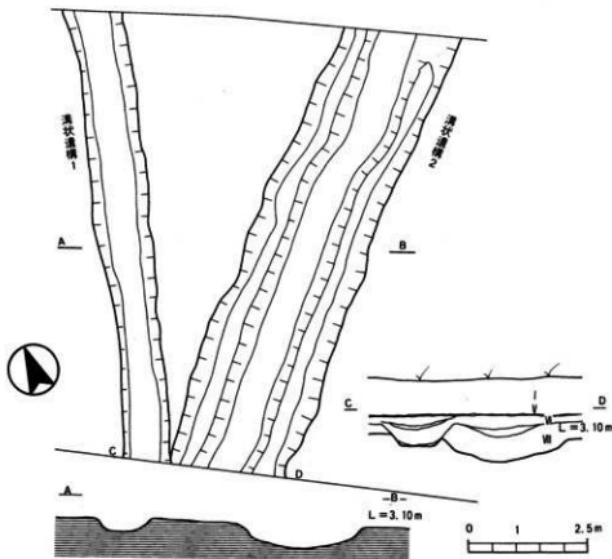
溝状遺構1（第24・25図）

7・8区で検出された。幅は約100~120cm、検出面からの深さは約25cmを測るが、土層断面から観察すると掘り込み面からの深さは約40cmである。溝の下面是ほぼ平坦であり、側面の立ち上がりも丸みを帯びず直線的である。方向はほぼ南北方向に走り、調査区域の南側で溝状遺構2と接し、切り合い関係にある。埋土の大部分は第VI層の黒色土であり、最下面に第VII層の暗褐色土層がみられる。黒色土の上にはレンズ状に灰色コラが堆積していた。

埋土中から26点の遺物が出土した。遺物は全て土器片で、甕形土器の破片等が認められたが細片のため固化できなかった。出土土器の胎土及び焼成は周囲の第VII層から出土したものとはほとんど大差は無く、ほぼ近接あるいは同時期に近いものと思われる。

溝状遺構2（第24・25図）

溝状遺構1に近接した位置で8区で検出された。埋土は第VII層暗褐色土層であり、上層の第VI層黒色土との間には赤褐色硬質土がレンズ状に堆積しているのが認められた。溝底面に近い部位では砂質が強くなり、軽石の小礫が多く混在しており、当時水が流れている状況を示していた。検出面からの深さは約50cmと溝状遺構1よりはかなり深く、第VII層灰褐色粘質土層まで掘り込まれていた。土層断面を検討したが掘り込み面は把握できなかった。溝底面は凹レンズ



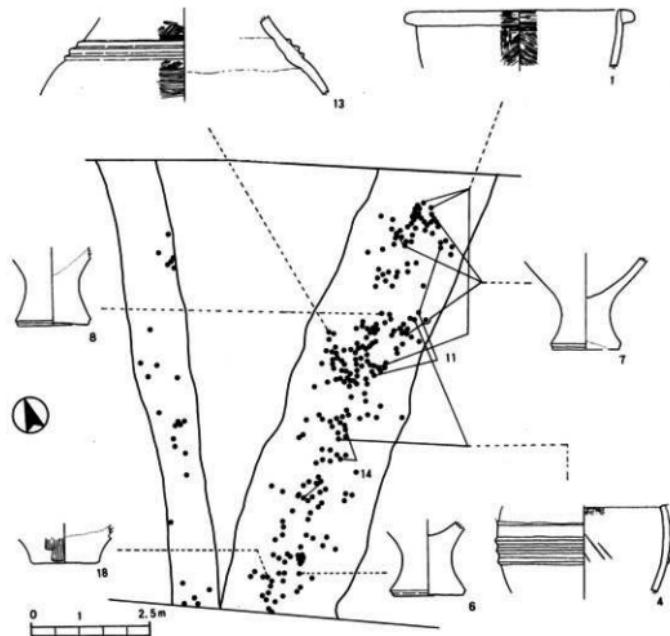
第24図 溝状遺構1・2平・断面図

状に丸味を帯び、両側でやや平坦になり、その後なめらかに立ち上がる。溝幅は約2.5mであり、南南西方向に伸びている。南側では溝状遺構1に切られている。溝状遺構1と同様に南側方向に深くなっている。

出土遺物

溝状遺構2からは237点の遺物が出土した。遺物は壺形土器と壺形土器であり第25図に示すとおりの接合関係が得られている。

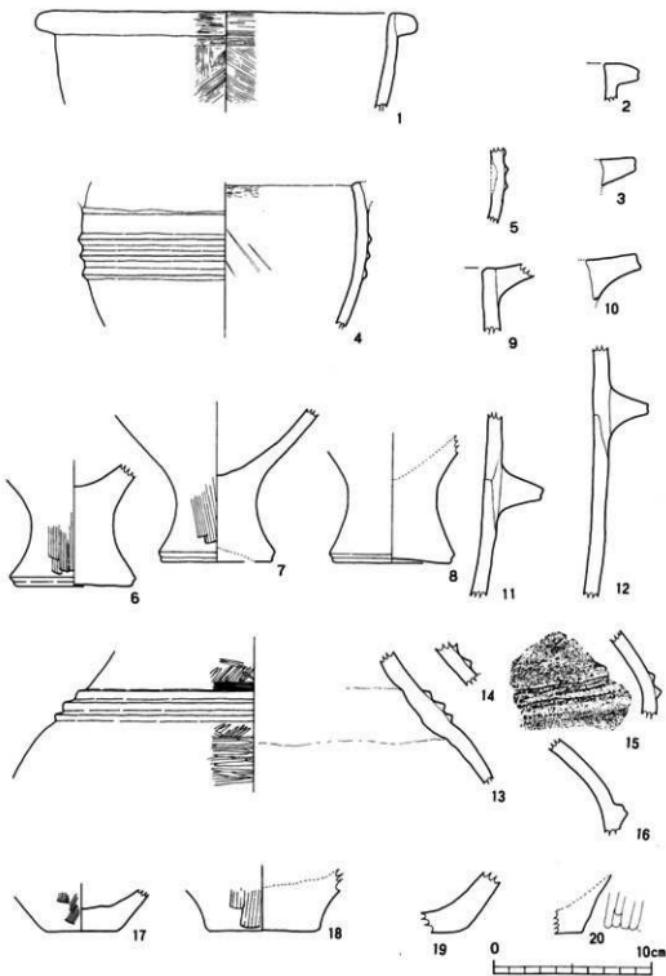
第26図1～8は壺形土器である。1は復元口縁径24cmで、口縁部は逆L字状に外反し、端部は丸味を帯びる。内外面ともハケ目調整が施されている。2はやや垂れ下がり気味の逆L字状口縁をもつもので、端部はやや凹む。3は口縁端部が接合面より離れたものである。4はやや丸味を帯びる胴部上位に三角突起を三条廻らし、逆L字状に外反する口縁端部は接合面から取



第25図 溝状造構1・2内遺物出土分布図

れている。器面調整は内外面ともハケ目調整が施される。5も胴部上位に三条の三角突帯を廻らすものである。6～8は壺形土器の底部で全て充実した脚台である。6は底部径7.5cmを測り、底面は平坦である。裾の端面は凹線が施される。器面調整はハケ目調整である。7は底部径7cmを測り、裾の端面状況及び器面調整は6と同様である。8は6・7と異なり底面は平坦でなく、やや上げ底となる。裾の端面は同様に凹線状となる。9～12は大型壺形土器であり、同一個体と思われるものである。口縁部は直口気味から逆し字状に外反し、口縁部の下位には断面台形状突帯を廻らす。口縁部端部及び突帯端部は凹む。器面調整は内外面ともナデ調整及びハケ目調整が施される。

13～20は壺形土器である。13は頸部に三条の三角突帯を廻らすもので、外面は横位及び斜位のヘラミガキによる細かい調整が施される。内面には輪積み痕が観察される。14も三角突帯を廻らす頸部である。15は胴部に二条の三角突帯を廻らすもので、器面調整は内外面ともナデ調整である。16は胴部に一条の断面台形突帯を廻らすもので、その突帯端面は凹む。内外面ともナデ調整である。17～20は壺形土器の底部であり、17は薄手で直線的に立ち上がり、18は厚手であり、外湾気味に立ち上がる。共にハケ目調整が施されている。



第26図 漢状造構2出土遺物



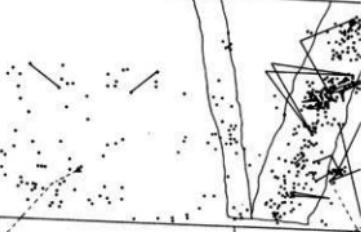
39



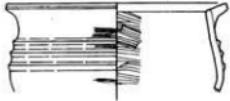
55

6

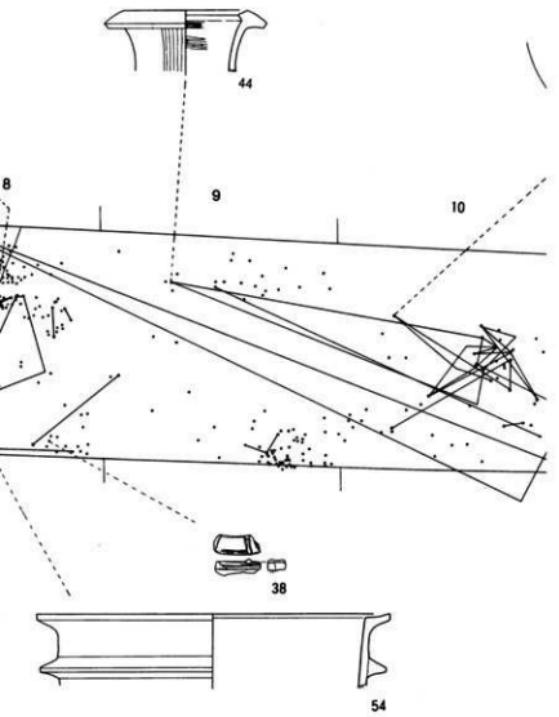
7



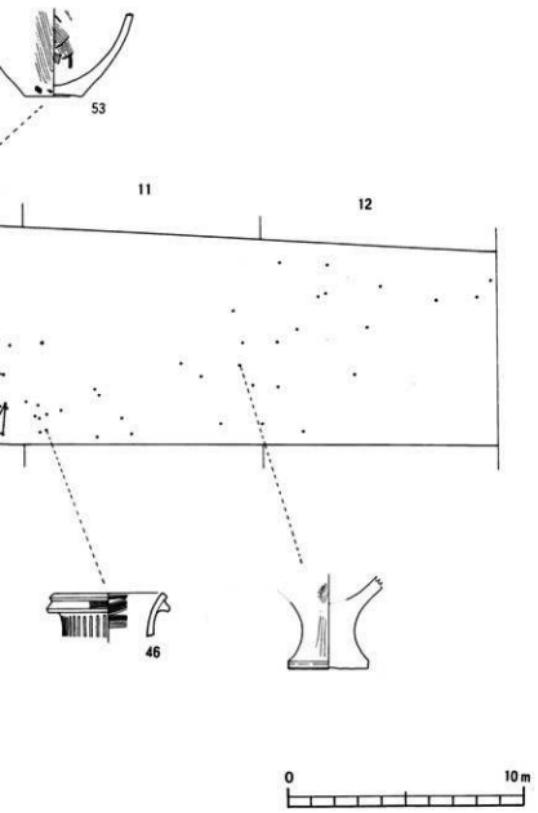
56

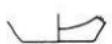


36

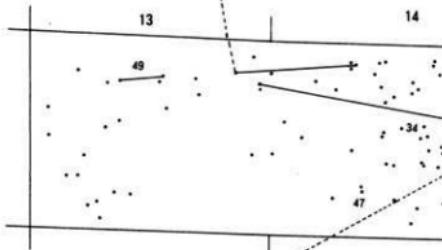


第27図 遺物出土分布図（1）





51

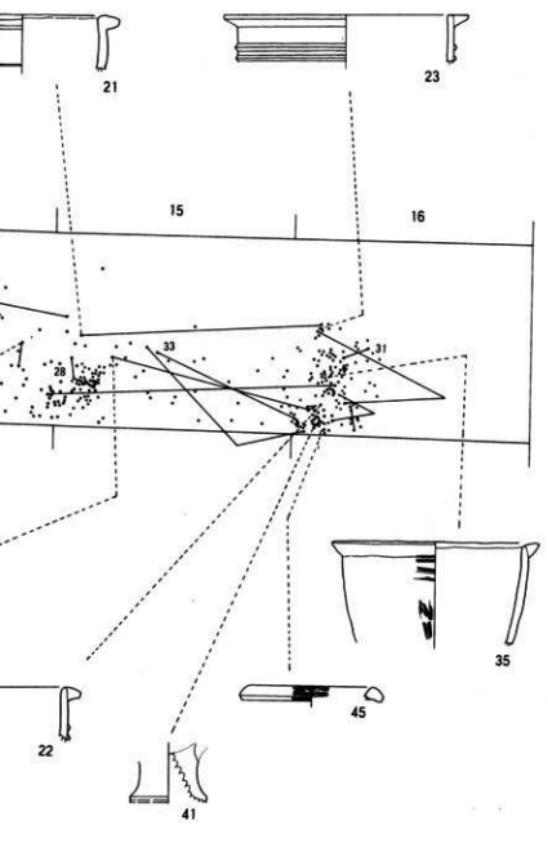


25

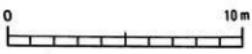


24





第28図 遺物出土分布図 (2)



第3節 弥生時代の遺物

(1) 遺物分布状態

弥生時代の遺物は西側でわずかに第VI層下半で出土したほかは第VII層を主として出土した。出土範囲は6区から16区にかけて広く出土し、1区～6区西半部は第VII層の遺物包含層が欠除していた。

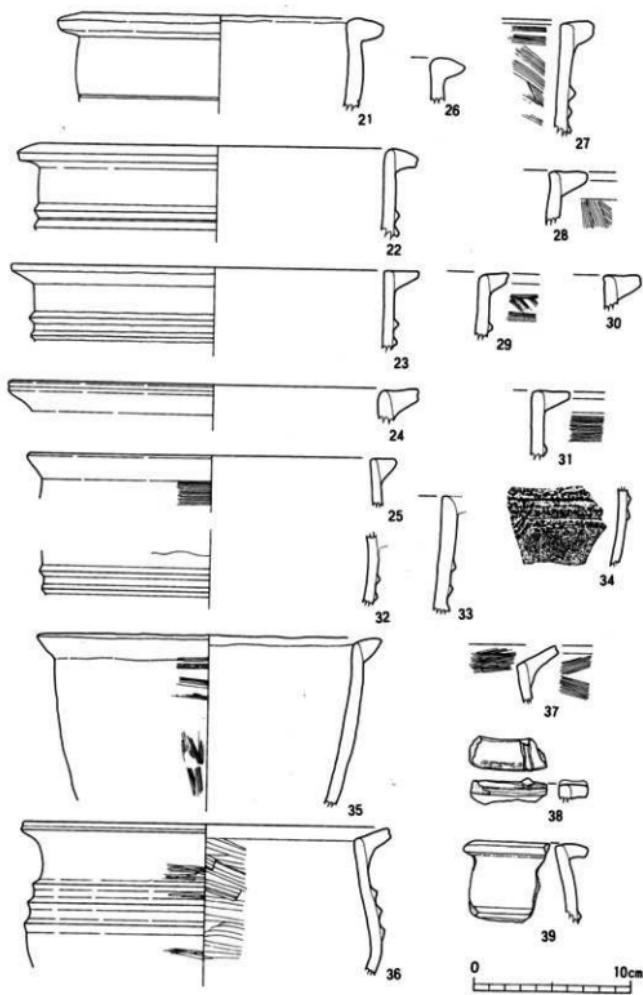
また遺物は全体に万遍なく出土しているのではなく、分布密度の濃い部分と疎くなる区域が存在し、二ヶ所の集中部が認められた。西側の集中部は6区から溝条造構を挟んで、10区までのもので、9・10区において接合関係がみられる。東側の集中部は14区から16区にかけて多くの遺物が分布しており、特に15・16区で接合関係が多く得られた。

出土した遺物には壺形土器、壺形土器、大型壺形土器、磨製石器、軽石製品などがあり、多量なものであったが、土器片は細片や胴部破片が多く、そのため図化できたものは多くない。

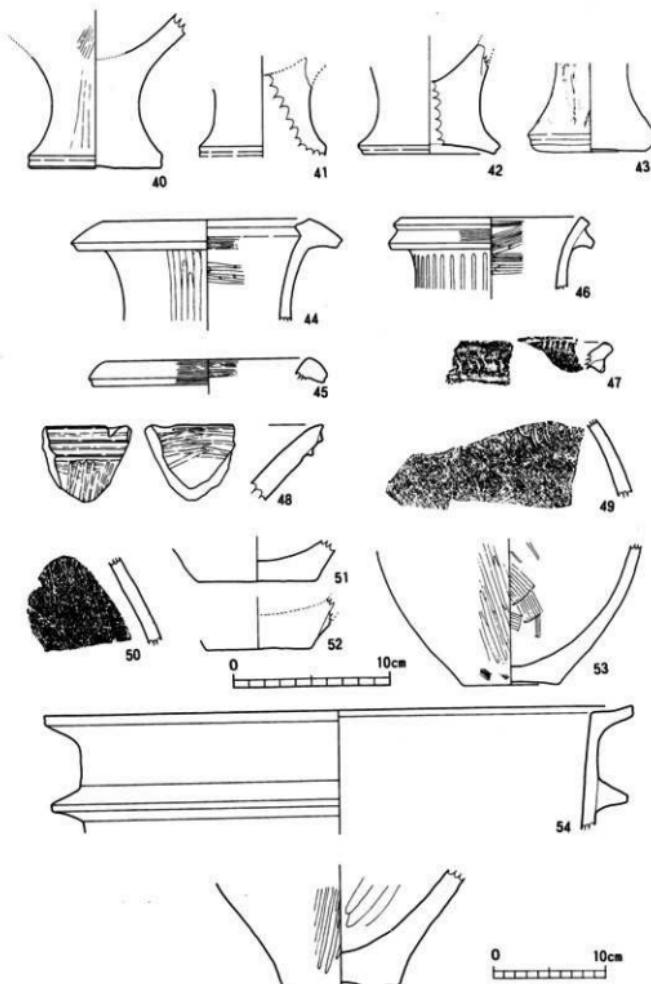
(2) 出土土器

第29図21～39は壺形土器である。21は復元口縁径21cmで、口縁部は逆L字状に外反し、端部はやや丸味を帯びる。胴部上位には細い沈線を廻らしている。器面調整は外面がハケ目調整後ナデ、内面はナデ調整による。22は復元口縁径が約25cmであり、やや垂れ下がり気味の逆L字状口縁をもつもので、胴部上位に二条以上の三角突帯を廻らす。口縁端部はわずかに凹む。内外面ともナデ調整が施される。23は復元口縁径約26cmで、逆L字状の口縁上面は平坦であり端部も平坦に仕上げている。胴部上位には二条以上の三角突帯が廻る。24・25も口縁部は逆L字状に外反するものであるが、24は端部に凹線が廻り、25の端部は丸味をもつ。26～31は逆L字状になる口縁部であり、26のようにやや垂れ下がるものや、27のようにやや上がるもの、あるいは平坦になるもの等がみられる。32は胴部上位に二条以上の三角突帯が廻るもので、口縁は接着面で剥落している。33も同様に口縁は接着面で剥落している。34は壺形土器の胴部片と思われるものであり、三角突帯が二条認められるほか、最下の三角突帯からわずかではあるが「ノ」の字状に三角突帯が付けられている。小片のためその突帯がどういう構成になるか不明である。35は復元口縁径22cmを測り、口縁部は逆L字状に外反し、やや上向きで「く」の字口縁に近づく。胴部には三角突帯は付かない。外面はハケ目器整後ナデ調整、内面はナデ調整を行っている。36は胴部が張り、口縁部は内傾し逆L字状に外反する口縁は上がり、端部面は平坦で凹線が廻る。胴部上位には三条の三角突帯が廻る。器面調整は外面が幅の狭いヘラミガキ調整、内面はやや太いハケ目調整がみられる。37も口縁部は内傾し、「く」の字状に開く口縁部はやや長く、平坦状となる端部は凹む。器面調整は内外面ともハケ目調整である。38は逆L字状の口縁上面の平坦な口唇部に張り付け突帯をもつもので端部はまるくなる。壺形土器よりは壺形土器の口縁部である可能性が高い。39はやや垂れ下がり気味の逆L字状口縁をもつもので、胴部上位に三角突帯を廻らす。これ1点のみ色調は暗茶褐色を呈し、表裏両面及び割れた断面部はかなりローリングを受けている。

第30図40～43は壺形土器の充実した脚台である。40の底径は8.5cmを測り、底面は平坦であ



第29図 弥生時代の遺物 (1)



第30図 弁生時代の遺物（2）

るが、中央部がわずかに凹む。裾部には凹線がはしる。器面調整は外面がハケ目後ナデ調整、内面はナデ調整による。41・42は胴部が接着面ではざれたものであり、42は上げ底状となる。43は表層出土のものであり、底面はわずかに上げ底状となり、底面からの立ち上がり部は丸味をもち、凹線状の沈線が廻る。外面に細いハケ目調整が施される。

44～53は壺形土器である。44は口縁径17cmで、口縁部は垂れ下がり気味に外反し、口縁内側に三角形状の突起を有する。器面調整は頸部外面は縱方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ調整である。45もやや垂れ下がり気味の逆し字状口縁をもつものである。46は復元口縁径が15cmで、外反した口縁下位に突帯を廻らし二叉状口縁を呈するものである。頸部にはヘラによる暗文が施されている。内面はヘラミガキ調整である。47も二叉状口縁を呈するものであるが、口唇部内側と口縁下位の突帯にヘラ状施文具による刻み目が施される。48は大きく外反する口縁部直下に二条の三角突帯を廻らす。器面調整は内外面ともヘラミガキである。49は肩部に櫛捲波状文を施したもので、50は胴部に細い沈線を二条廻らす。51・52は平底の底部である。53はやや上げ底状の底部で、器面調整は外面がヘラミガキ、内面はハケ目調整である。

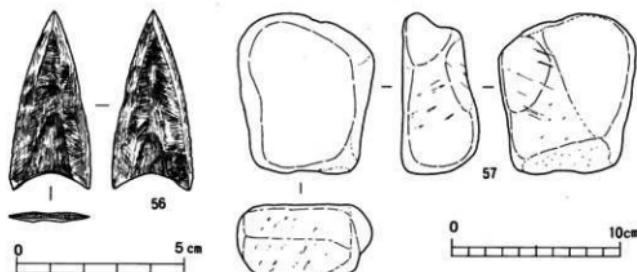
54は大型壺形土器で復元口縁径は53cmを測る。逆し字状に外反する口縁下位には突帯が廻り外面の器面調整はハケ目、内面はナデ調整である。55は大型壺形土器の底部と思われるもので底部中央部は凹む。外面はヘラミガキ、内面はハケ目調整が施されている。

(3)石器

第31図56は磨製石鎌であり唯一の石器である。長さ5.3cm、幅2.4cm、最大厚3mm、重さは4.5gを測る。全体に入念な研磨が施され薄身である。研磨は平坦な中心面と両側縁刃が区別され、最後に着装のため表裏とも基部近くを凹レンズ状に仕上げて溝をつくる。基部は弧状のえぐりをもつ。石材は頁岩である。

(4)軽石製品

これも1点のみの出土であり57は、軽石礫で、部分的に磨いた痕跡が認められる。最大長は9.5cm、最大幅8.1cm、最大厚4.6cm、重さは115gを測る。

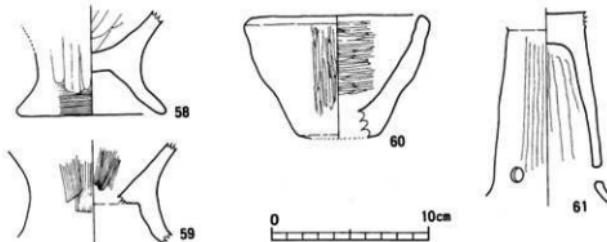


第31図 弥生時代の石器・軽石製品

第4節 古墳時代の遺物

表層から出土したものには古墳時代のものと思われる土器もみられた。

第32図58は壺の底部であり、脚台は大きく開き、端部は丸味をもつ。器面調整は外面の脚台下半は横ナデ、上半及び内面はヘラ状調整具によるナデが施されている。59も壺の底部であり、内外面ともハケ目調整が行われている。60は小型の鉢であり、復元口縁径は約11cmを測る。器壁はやや厚みがあり、口縁は内湾気味である。器面調整は、外面は縱方向、内面は横方向のヘラケズリである。61は高杯の脚部であり、筒部下位に三ヶ所の穿孔が施されている。



第32図 古墳時代の遺物

第5表 弥生時代土器観察表

遺物 番号	出土区	層	器種	胎土	焼成	器面調整			遺物 番号	出土区	層	器種	胎土	焼成	器面調整			備考
						外	面	内							外	面	内	
1	8 - 10	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ハケ目		29	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ハロハロ	ナ		
2	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ハケ目		30	14 - 16	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	テ
3	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目			31	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ハロハロ	ナ		
4	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	32	15 - 16	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	テ
5	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目			33	15 - 16	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	テ
6	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	34	14	7	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ		
7	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	35	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ハロハロ	ナ		
8	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目			36	8 - 9	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	カキ	ハケ目	
9	8	大掛	壺	石・長・角・直	良好	ハ	テ	ハケ目	37	9 - 10	7	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ		
10	8	大掛	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目			38	8	7	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ		
11	8	大掛	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	39	6	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ローリング	
12	8	大掛	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	40	7 - 8 - 11	7	壺	石・長・角・直	良好	ハロハロ	ナ		
13	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	41	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ		
14	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	42	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ		
15	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	43	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目			
16	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	44	9 - 10	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	カキ	ナ	テ
17	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	45	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ		
18	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目			46	11	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	カキ	暗文	
19	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目			47	14	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ		
20	8	溝	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ		48	13	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	カキ		
21	15 - 16	7	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	49	13	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	テ
22	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	50	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ハロハロ	ナ	テ	沈
23	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	51	13 - 14	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	テ
24	15 - 16	7	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	52	8	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ		
25	14	7	壺	石・長・角・直	普通	ナ	テ	ナ	53	10	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	カキ	ハケ目	
26	16	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ナ	54	8 - 6 - 7	大	壺	石・長・角・直	良好	ハケ目	ナ	テ	
27	14	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ	ハケ目	55	8	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	カキ	ハケ目	
28	15	7	壺	石・長・角・直	良好	ナ	テ											

第5節 歴史時代の遺構

表土を取り除いた第V層上面で、歴史時代のものと思われる溝状遺構が四本検出された。これらの埋土からは遺物が全く認められず、時期を決定することが困難であり、歴史時代とした。溝状遺構は10区から12区にかけてほぼ平行にはしるものが三本、13区に一本検出され、西側から3・4・5とした。

溝状遺構 3

三本並ぶなかで最も西側にあり、最大幅330cm、最小幅185cmを測り他と比較して最も幅が広い。また両側のラインも他は直線的に平行しているのに対し、これは数ヶ所で張り出し幅が一定していない。底面は丸味をもち、中央部は一段低くなっている。検出面からの深さは約43cmである。埋土は青灰色土層を主とし、下部底面近くは砂質が強くなり、底面は赤褐色を呈し硬質化している。これらのことから、溝状遺構3は水が流れていたことが推定される。溝の方向はほぼ南北方向であり、南側が若干深くなっている、北から南に水が流れていたと想定される。埋土中から遺物は全く出土しなかった。

溝状遺構 4

平均幅約95cmを測り、近接した三本の溝のなかでは最も狭いものである。埋土は青灰色土層であり、底面は平坦である。南側が若干深くなっている。検出面からの深さは23cmである。

溝状遺構 5

最大幅110cmを測り、溝状遺構4と同様に底面は平坦で、埋土及び方向も同一である。また南側が同様にやや深くなっている。溝状遺構4と約170cm離れた位置に所在する。検出面からの深さは26cmである。

溝状遺構 6

13区で検出された。南側の幅は38cm、北側の広い部分は80cmであり、中央付近の深さは6cmである。中央部の残りが良好で、南側及び北側はわずかに痕跡が残る程度であり、北側は確認することが困難であった。埋土は暗褐色土層であり、埋土中から遺物等は認められなかった。

第6節 歴史時代の遺物

歴史時代の遺物はすべて表土層からの出土である。遺物は青磁、白磁、染付、土師質土器、備前焼等である。

1 青 磁

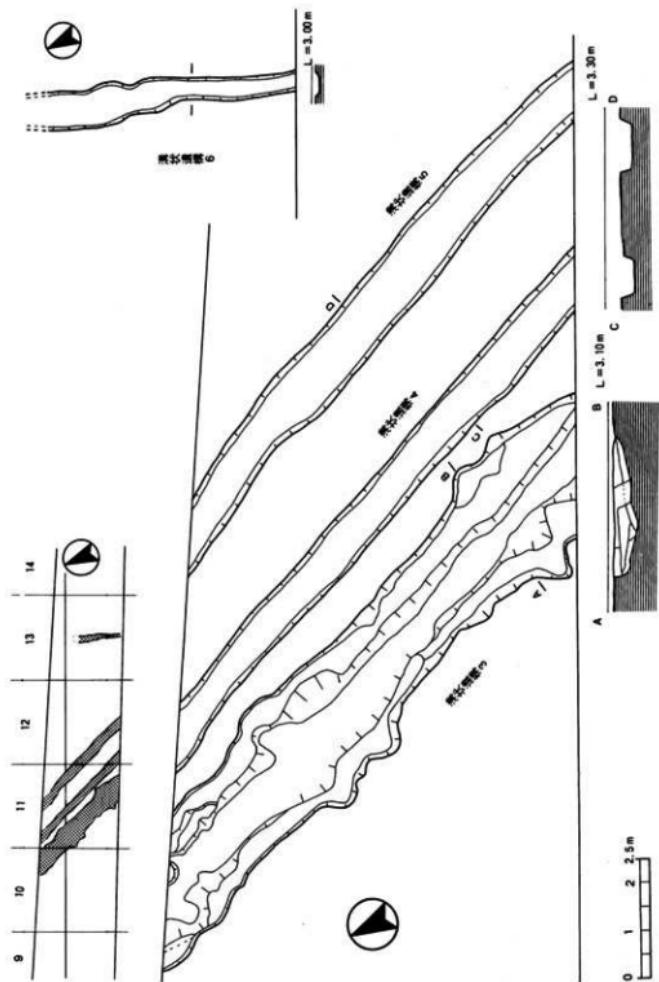
62は稜花皿口縁部片である。口縁部内面にはヘラ描線文を描いている。色調は青緑色を呈し、やや粗い貫入が入る。

2 白 磁

63は復元口縁径13cmを測る端反形の皿である。器高2.8cm、高台径7.8cmを測る。釉は完全に融けていないためかやや透明感に欠ける。無釉は疊付部分のみである。

3 染 付

64~74が染付である。これらは器形から65~67の碗と64、69~74の皿に分けられる。



第33図 歴史時代の遺構

64は端反の皿である。外面の口縁端部に圓線を1条、胴部に草花文を吳須で描く。見込みには口縁端部に圓線を1条描いている。

65~67は連子碗である。65、66が口縁部片、67が底部片である。65は口縁端部の内外面に圓線を2条づつ描き、胴部外面に点文（簡略化された花文）の連続文を描く。66も口縁端部の内外面に圓線を2条づつ描くが、胴部外面は梵字文の連続文を描く。67は見込みに2条の圓線を描き、その内部に点文（簡略化された花文）を同心円状に描き、外面は胴部に点文（簡略化された花文）の連続文を描き、高台際とその下位に2状圓線を描く。高台径は5.3cmを測る。65~67の上軸は青みを帯びるものである。

68は碗形の碗である。外面の口縁部には菱垣文様の圓文を描き、胴部には蕉葉文を連続して描く。見込みには口縁端部に2条の圓線を描く。上軸は発砲状態のままであり、表面はピンホール状となっており、色調もやや青みがかかる。

69~72は底部が基筒底を呈するものである。69は外面の腰部に蕉葉文と2条の圓線を描き、見込みには2条の圓線と中央に十字花文を描く。外面にはピンホールがみられる。上軸はやや青みを帯びる。70は見込みには2条の圓線と花文を描く。中央部は上軸の上からさらに白土がのせられている。上軸は焼成が不十分なためか細かい発砲がみられる。また一部に貫入がみられる。71、72は見込みに人形寿字文を描くものである。71の外面には口縁端部と腰部の圓線の間に簡略化された草花文を描く。焼成が粗いためか内外面に粗い貫入がみられる。72は透明感のあるものであるが、大きな貫入がみられる。疊付けには目砂が付着している。

73は皿の底部片である。焼成時の熱のためか、見込み中央はやくぼんでいる。見込みに花文を描き、外面には唐草文を描く。上軸に細かい発砲がみられる。

74は棗花形の皿である。腰部はやや立ち上がる。見込みには線画とだみ染で山水文を描く。

4 土師質土器

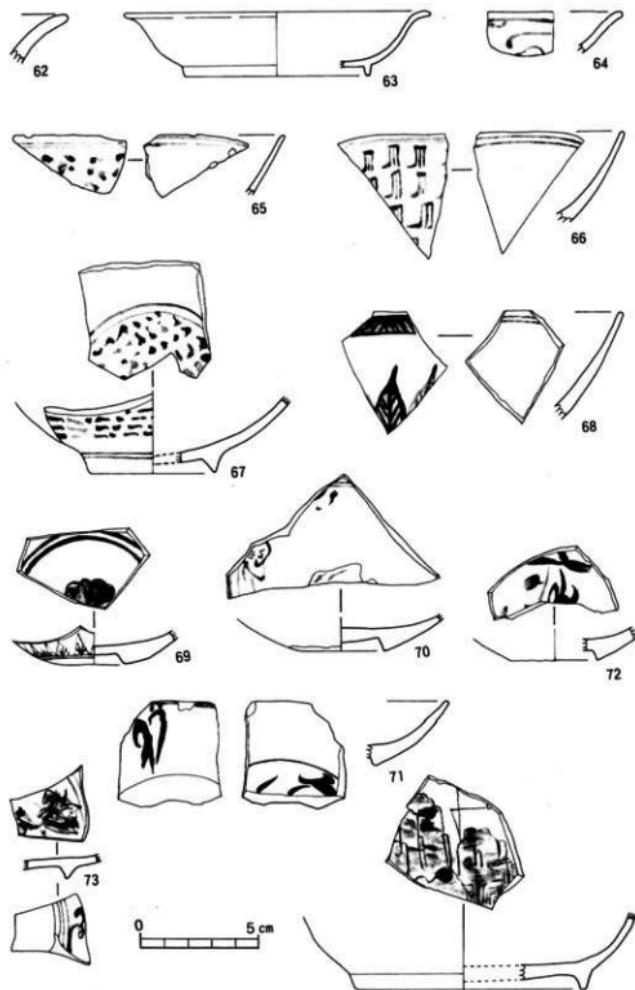
75~77が土師質の土器である。75は復元底部径20.8cmを測る盤である。口縁部はやや内湾気味に開くもので、口唇部は水平となり、張り付けによる取っ手状の肥厚部を有する。底部はあげ底で、ヘラおこしてある。内外丁寧なナデ調整が行われており、外面茶褐色、内面明黄茶褐色を呈する。胎土に微細砂粒を含み、焼成は良い。

76、77は同一固体と考えられるものである。やや大型の壺形土器と考えられる。口縁部は直口で、肥厚する。外面は横位の刷毛目調整が施されている。ススが付着し、黒褐色を呈する。内面も横位の刷毛目調整が施されている。茶褐色を呈する。胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。

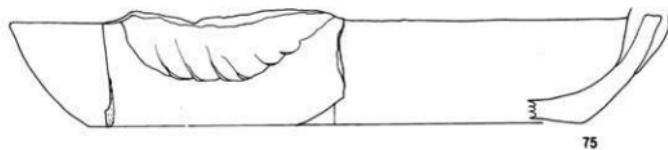
5 陶 器

78は須恵質の陶器である。外面は格子目叩きを行った後、ナデ調整を施す。内面もナデ調整であるが輪積みの後が残る。内外灰茶褐色を呈し、焼成は良い。

79、80は同一個体と考えられるもので、備前焼鋏鉢の口縁部片である。口縁部下は外に張るために一条の棗線となる。色調は焼成が不完全なためか、口縁部が淡赤褐色、他の内外面は淡茶褐色を呈する。内部の条線帶は1束8本で底部から搔き上げている。



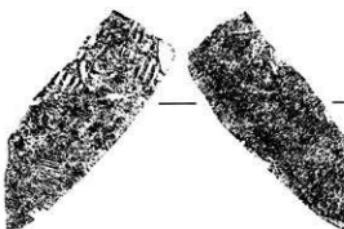
第34図 歴史時代の遺物（1）



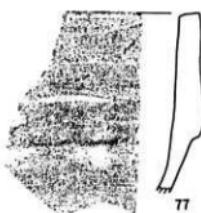
75



76



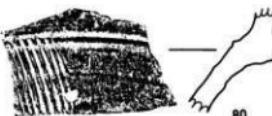
78



77



79



80

0 5cm

第35図 歴史時代の遺物 (2)

第7節 小 結

下伊倉遺跡は、弥生時代を主とする遺跡であり、多くの遺物が出土し、また、弥生時代の溝状遺構が二本検出された。調査面積は割と広いものであったが、実際は丘陵の縁辺部をトレントチ状に調査したのみであり、遺跡全体からすると狭小なものと言える。そのため遺跡全体の性格等について判断することはできないが、今回調査した部分について若干触れることによってその一端がうかがえよう。

溝状遺構について

検出された二本の溝状遺構はともに8区で確認され、両溝は近接した位置にある。その位置は丘陵の縁辺部にあたり、すぐ西側には肝属川の旧河川跡があり、それとほぼ平行しているような印象を受け、溝状遺構の性格を想定する上で重要な手がかりの一つとなろう。また溝状遺構2は、埋土の下部底面近くは砂質が強く、水が流れている可能性が強いものであった。その方向は丘陵を廻るように西流する肝属川が流れる南側へと向かって深くなっている。

溝状遺構1と2は、その幅及び深さ等の規模が異っており、性格等の差に起因したものか、問題の残るところである。さらに二つの溝状遺構は南側で切り合い関係にあり、溝状遺構2より溝状遺構1の方が新しいもので時期が異なることが判明した。その時間差の基準となるべき埋土から出土した土器の比較は、溝状遺構1より出土したものが量的に少なく、同時に小破片のみであり比較資料とならなかった。

溝状遺構2から出土した土器は壺形土器・大型壺形土器・壺形土器があり、溝外から出土した土器とも接合関係が認められた。このことは弥生土器集中部である西側と同時期のものと思われる。

これらの溝状遺構は、全体の一部分であり、さらに南北に伸びているものと推定されるが、全体が把握された時点で性格等が明確になろう。

出土土器について

弥生時代の土器は、その遺物包含層である第Ⅷ層から大部分出土し、壺形土器・壺形土器・大型壺形土器などの器種がみられた。

包含層出土の土器分布は大きく二ヶ所の集中域を形成し、各々の集中域でのみ接合関係が認められた。西側の集中域は6区から10区と比較的広く、東側の集中域は14区から16区にかけてのものであった。西側集中域のなかには溝状遺構が所在し、溝状遺構2から出土した土器と、遺構外出土の土器が接合した。このことにより、西側集中域と溝状遺構2とは同時期の所産と判断されよう。以下出土土器について、東側と西側に区分して述べる。

西側出土の壺形土器は、逆L字状に外反する口縁部がわずかに上向きになり、「く」の字口縁に近づくもの(36)、あるいは「く」の字口縁を呈するものが認められ、底部はわずかに上げ底状となっている。壺形土器は垂れ下がり気味の口縁をもつものや、二叉状口縁を呈し頸部に暗文を施すものが出土している。

東側出土の壺形土器は逆L字状に外反する口縁部は、水平になるものからやや垂れ下がり気

味になるものが認められ、底部は上げ底状となっている。壺形土器はやや垂れ下がり気味の口縁をもつものや、二叉式口縁を呈し、口唇部と口縁直下の突帯に刻みを施すものが小破片ではあるが出土している。

これらの東側及び西側出土の土器は、いわゆる山ノ口式に該当するものと思われるが、東側と西側では若干の形態差が認められ、西側出土のものより、東側出土の方がより古い様相を示している。出土した土器は破片が多く不充分な資料であるが、仮に東側集中城のものを下伊倉Ⅰ、西側集中城のものを下伊倉Ⅱとして、各々の時期的設定をしておきたい。

さて、最近、山ノ口式土器の所属する時期について、論議が行われている。これまで、山ノ口式は弥生時代中期後半に位置づけられてきたが、⁽¹⁾王子遺跡の調査で瀬戸内系の脚部に矢羽状透かしを有する高环及び口縁部に凹線文を施す壺形土器も出土し、後期前葉まで下るものもあるとする考えが出されている。⁽²⁾こうした状況のなかで、瀬戸内系土器のありかたから山ノ口式の編年細分試案も発表されている。⁽³⁾

これらを参考にして下伊倉遺跡出土の土器を検討すると、吉ヶ崎遺跡タイプと王子遺跡タイプの中間の位置に比定され、そのなかで下伊倉Ⅰは吉ヶ崎のすぐ後の段階に、下伊倉Ⅱは王子の少し前の時期に位置づけられよう。

今回調査した部分は遺跡全体からすると、わずかな面積であり、遺物自体も器形の全体を知り得るものはなく、今後改めて検討される必要がある。

また21のように、垂れ下がり気味に外反する口縁下位に、沈線が廻る中期前葉の入来式に並行するような土器も存在しており、土器の移動等や包含層自体の問題等今後に残された課題は少なくない。

注① 河口貞徳『山ノ口遺跡』鹿児島県文化財調査報告書7 1960

河口貞徳『新南九州弥生式土器集成』鹿児島考古15号 1981

注② 森貞次郎『弥生文化の発展と地域性－九州－』日本の考古学III 1966

石川悦雄『宮崎平野における弥生土器編年試案－素描－』宮崎考古9号 1984

注③ 中村耕治『弥生時代』鹿児島考古20号 1987

参考文献

- ・河口貞徳『入来遺跡』鹿児島考古11号 1976
- ・中村耕治『大隈地区埋蔵文化財分布調査概報』鹿児島県教育委員会 1984
- ・立神次郎『王子遺跡』鹿児島県教育委員会 1985



下伊倉城跡を西上空より

図版 2



東側上空より



北側上空より



下伊倉城跡近景（東より）



下伊倉城跡（南より）



下伊倉城跡（増水時 東より）



下伊倉城跡（増水時 内濠）



確認調査風景

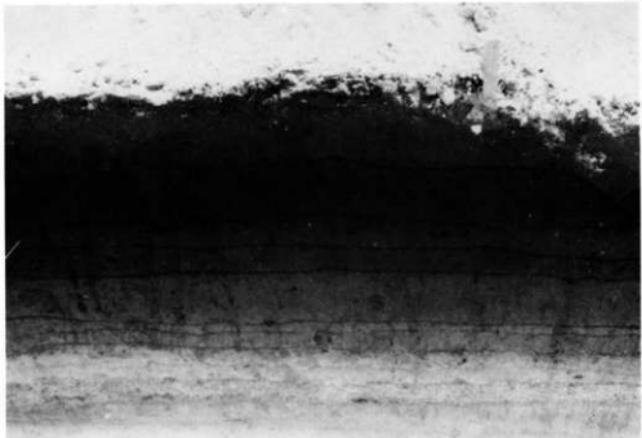
図版 6



第15-C トレンチ土層



第21-C トレンチ土層



第23トレンチ土層



第29トレンチ土層

図版 8



第37トレンチ土層



塚土層



伐採風景

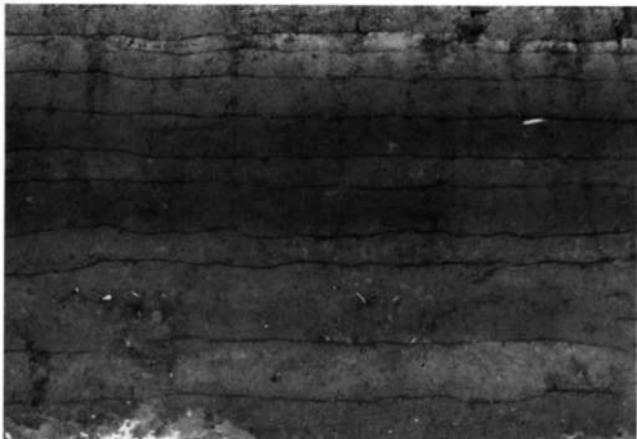


調査風景

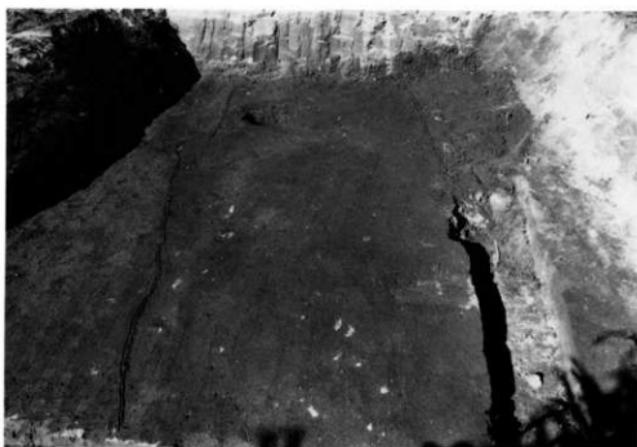


調査風景

図版12



下伊倉城跡土層



溝1 確認状況



溝1 掘出状況



溝2 掘出状況

図版14



ピット群2 検出状況



古道検出状況



井戸状造構断面



西側外濠断面



西侧内漆断面



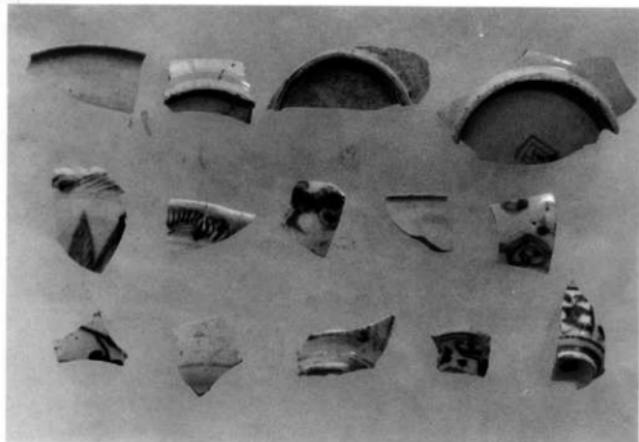
东侧内漆断面



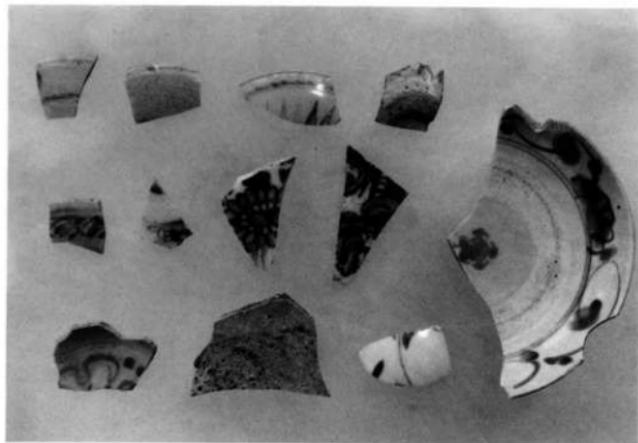
塚断面



下伊倉城跡出土遺物(1)



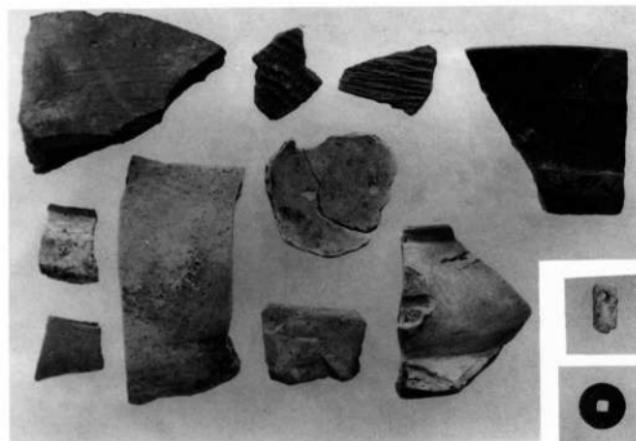
下伊倉城跡出土遺物(2)



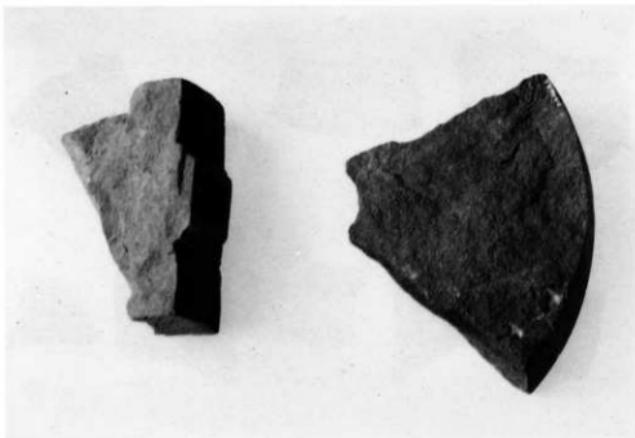
下伊倉城跡出土遺物(3)



下伊倉城跡出土遺物(4)



下伊倉城跡出土遺物(5)



高山総繪圖（部分）



土層断面



土層断面



溝狀遺構 1 檢出狀況



溝狀遺構 1 內遺物出土狀況



溝状遺構2 遺物出土状況



溝状遺構1,2掘り下げ状況



遺物出土狀況



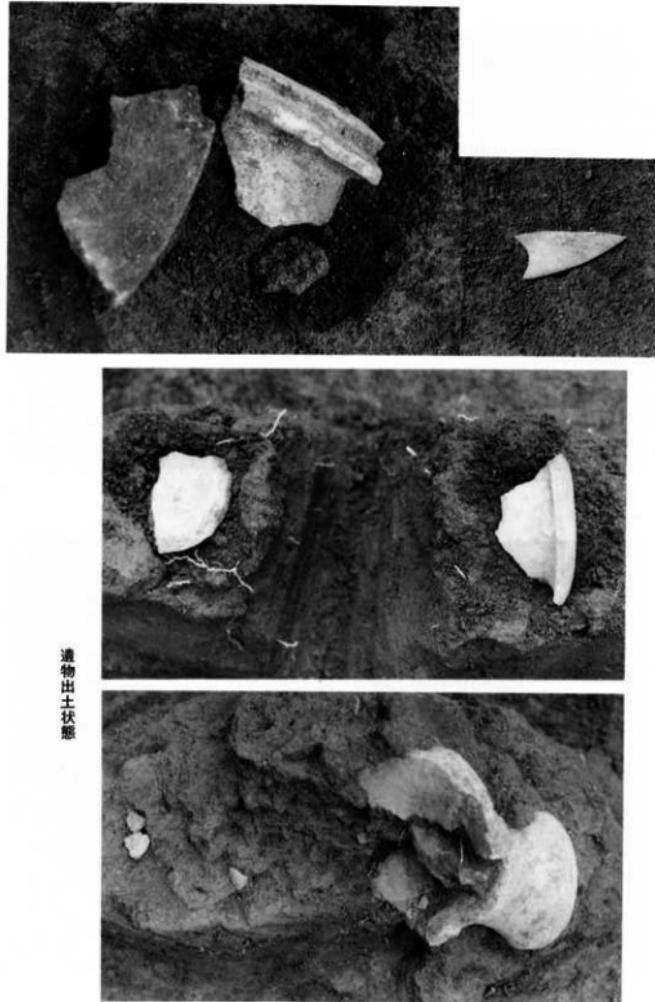
遺物出土狀況



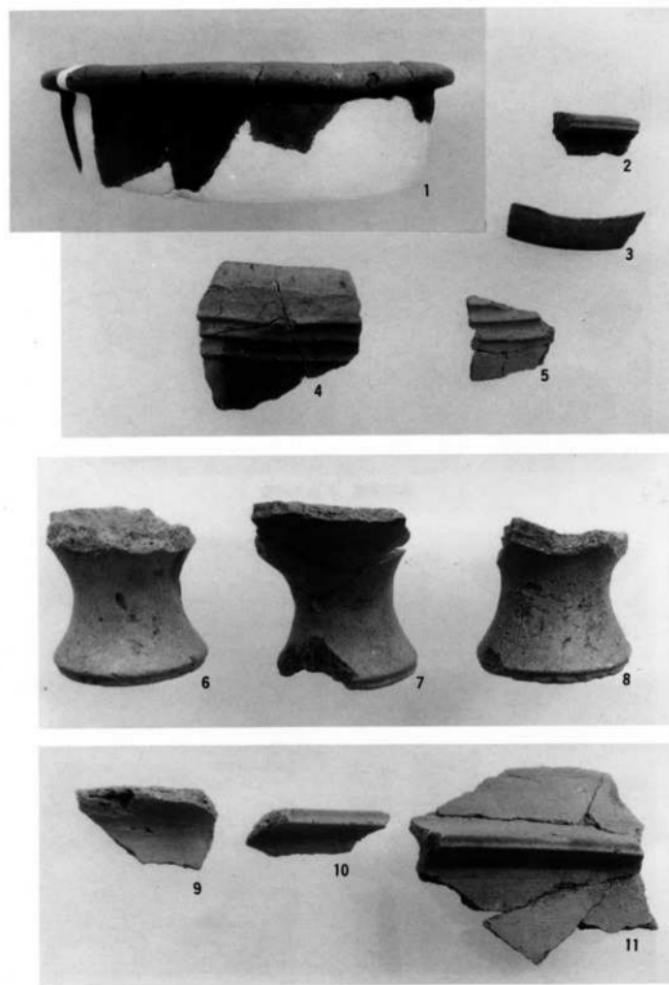
遺物出土狀況



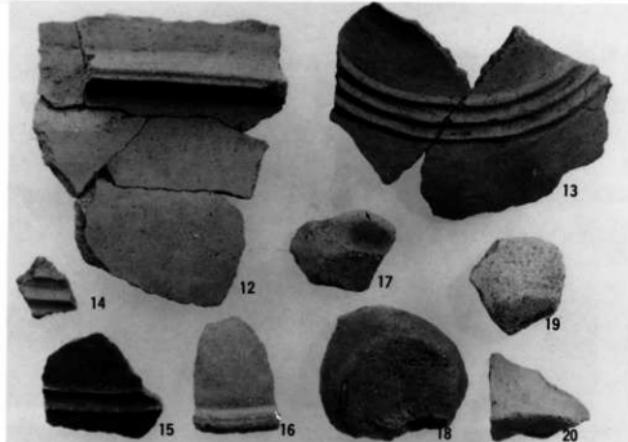
遺物出土狀況



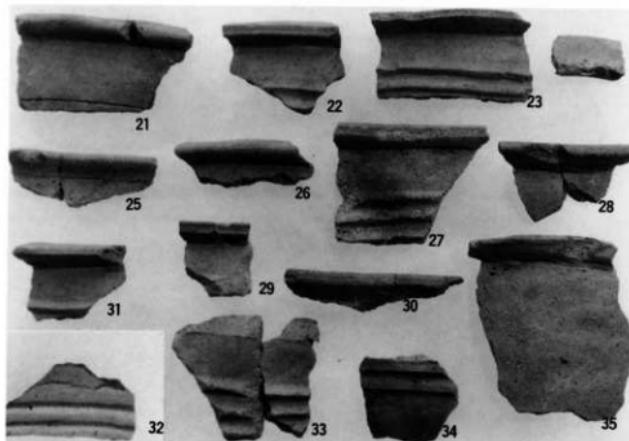
遺物出土状態



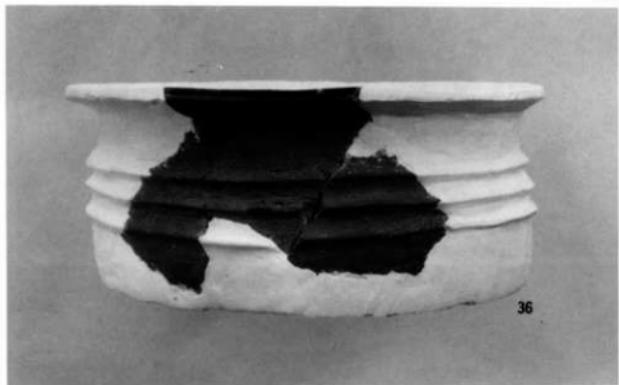
溝状遺構 2 出土遺物



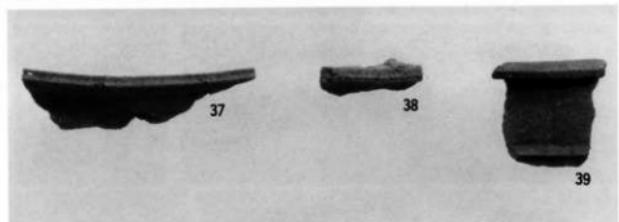
满状遗构 2 出土遗物



包含层出土遗物



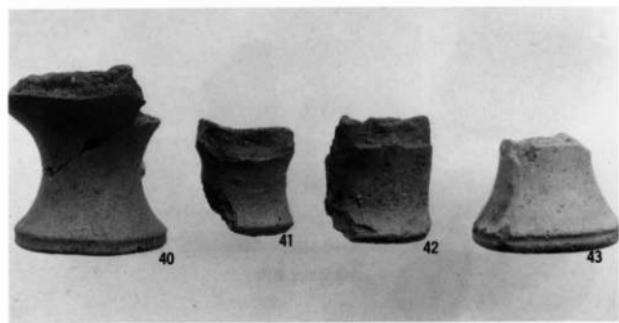
36



37

38

39



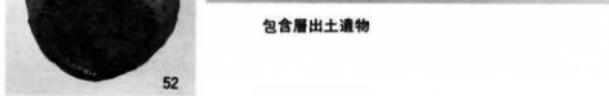
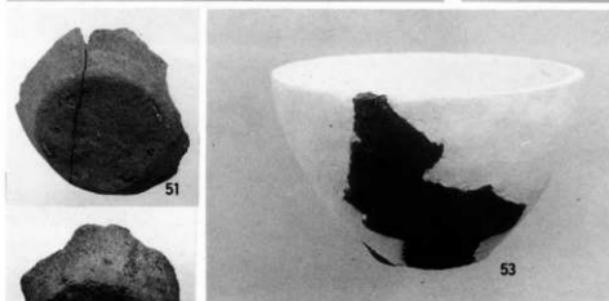
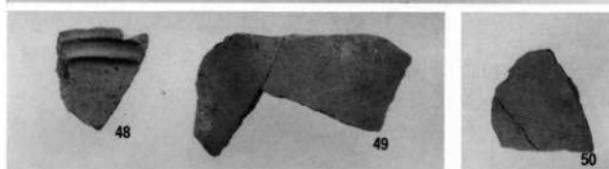
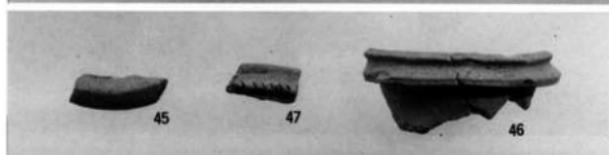
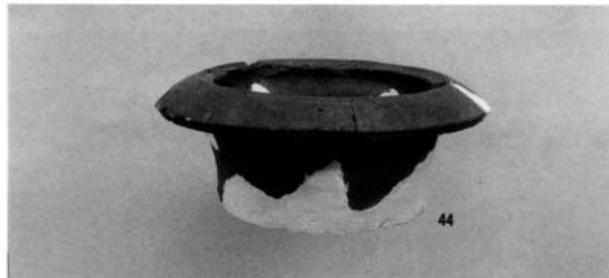
40

41

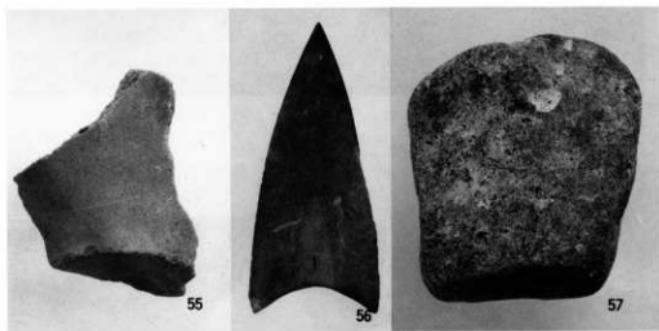
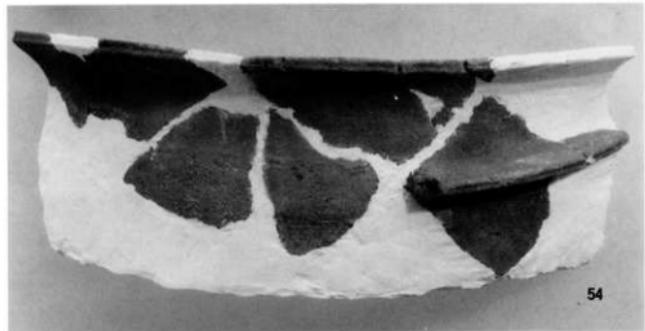
42

43

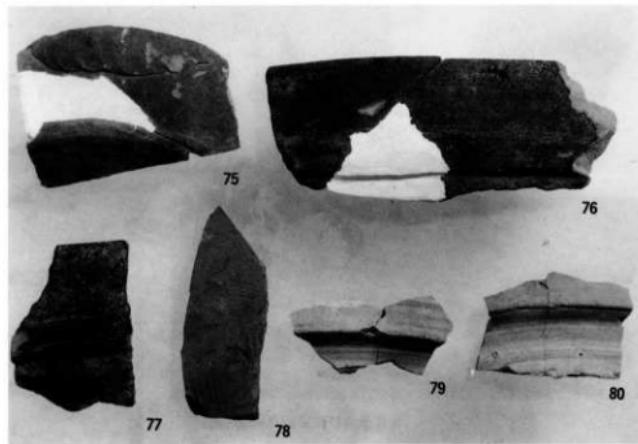
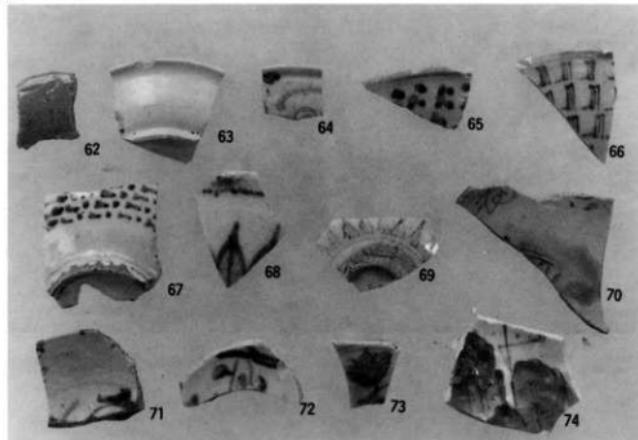
包含层出土遗物



包含层出土遗物



包含層及び表層出土遺物



表层出土遗物

東串良町下伊倉城跡にのこる石塔群

南九州古石塔研究会

河野治雄

一、現況

1. 所在地 鹿児島県肝属郡東串良町新川西字城ノ山
2. 名称 下伊倉城跡の中世古石塔群
3. 形態 五輪塔・宝塔及び五輪塔の残欠
4. 数量 五輪塔 8基・五輪塔の残欠 2基分（空・風輪・地輪共に欠失）
宝塔 4基（相輪は大隅半島に多い形式をもっている）
何れも昭和54年（1979年）8月以後復原整備されたものによる遺存数である。
5. 石質 全て凝灰岩（灰黒色）
6. 銘文 上記の石塔群中 五輪塔の一基に（火輪部）次の年紀・人物法名等の刻銘がある。
「永禄九年 閏八月九日」（年号）
「飯田 石口守」（人名「謙田・或は飯田と読んだものも有る）
「道賀口閻門」（法名）
7. 年代 上記の銘文により永禄9年（1566年） 戦国時代末期のころとする。

二、下伊（井）倉城址の古石塔群について

- (1) 上記の石塔群は、下伊（井）倉城址の旧土塁の一隅につくられている改葬された集落の墓地の前に復原されているものである。傍らには東串良町教育委員会によって建てられた二本の標柱がある。一本には「史跡 下伊倉城外堀跡・昭和六十年四月十日建立・東串良町教育委員会」とあり、他の一本には「中世古石塔群（逆修塔）・昭和六十一年四月十日建立・東串良町教育委員会」（図版1参照）とあり、一面に「逆修塔・合戦にのぞむ武将が生前に自分のために仏事を営んで冥福を祈ってたてた石塔」と解説が加えている。

現存の石塔群は上記の如く12基復原され、脇に空・風輪や地輪を欠いた小型の五輪塔残欠が二列に並べられている。（図版1参照）

之等の石塔群については、下伊倉 肇氏（町文化財審議員）の話によれば、昭和二十三年（1948年）ごろ肝付川の拡幅工事の際に、城の北西部にあったものを現在地に集めたものであるという。

旧西串良村の絵図面によれば、川岸近く「飯田氏墓、永禄九年八月九日」の記載があり、この墓のことでもあるという。当時は道路の脇にまだ大きな五輪塔もあったように記憶しているとのことであったが現在地には今はそれらしいものは見当らない。（114頁絵図参照）

また、同氏が昭和五十八年十二月に作成した「下伊倉城略図」によれば、現在の残された城址の外堀土塁の北端に「五輪塔」図があり「コドラン墓」の墓塔のしるしが付されている。現

在の石塔群の所在を示すものであろう。聞くところによれば、僧侶の墓（無縫塔又は卵塔）らしいものもあるって、改墓の時うめられたらしいとのことであった。「寺址」でもあったのかと想定もされる。

なお、昭和二十三年に移動された文等の石塔群は、現在のように復原されたのは、昭和五十二年から昭和五十四年ごろにかけて、南九州古石塔研究会の黒田清光（故人）や園田良賛氏等の調査研究がなされており、園田良賛氏の調査資料が残されている。それによれば「五輪塔は完形九基、内六基は時代的に古いものである。五輪塔の軒先きの厚さは13cmのもの六基、他は中央部が10cmで軒端が20cmである。時代は応永中期から戦国時代の後期ごろ」との推定がなされている。また、五輪塔一基を除いては銘ではなく、五輪塔の一基に「永禄九年八月九日、鎌田石見守、道賢押定門」の刻銘がこされていると報告されている。（五輪塔の火輪部に示された拓影を参照）

「宝塔については、四基あり、完形である。ほぼ同形、同高であるが、代表的なものは、相輪高が52cm、笠石21cm、塔身22cm、基礎20cmである。相輪は宝冠形で、宝輪の数は6輪が多い。

塔身の首部高は3.5cmである。首部にはたての刻みがつけられている。総高は凡そ115cm程度である。」と報告がよせられている。

(2) 五輪塔について

五輪塔とは密教のおし

えによって、この宇宙を「地・水・火・風・空」の五要素から成り立っているという五大思想にもとづき、儀軌に示される五輪図をもとにして、宝珠、半月、三角、球、四角の形で象徴して五輪とよび塔形にしたもので、わが国で独自に発達した石製の塔婆である（次頁図と写真・図版1参照）。それぞれ特徴をもった五つの形から合成された石塔婆である。五輪塔は本来は密教における最上の根本仏（大日如来）を表現したもので信仰の対象であった。後には供養塔や、



墓塔として用いられるようになったのは、その造立による善根功德によって死者えの速やかな成仏を祈り（追善供養）、また自らの死後の為めに廻向することを願うもの（逆修供養）であったからである。従って五輪塔は五輪が一体となればその本質がうすれてしまうことになる。五輪塔は文字（銘）がないことが多い。それが本来の形といわれるが、銘文を有する時は造立の時期が明らかである。

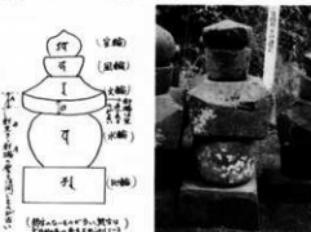
造立の趣旨、造立者、被供養者等がわかるが、文字などがない場合でも、時には五輪塔の形態から時代を判定することは可能な事がある。特にその特徴は火輪（笠）に於てあらわれており時代が判定できるといわれている。空、風輪、水輪、地輪においてもそれは認められる。

さきの園田氏の報告で、五輪塔の軒先きの厚さや軒端の厚さについて特に記述されているのはそのためである。図で示したもののは軒先き、軒端の厚さが同じであり、反りは少なく、軒端の下りは大体垂直であるが、下伊倉城址にあるものは軒先きと軒端の厚さの異りが目立ち、反りも大きいし、内側に入っていることがわかる。然し「永禄九年（1566）」の年代をもつことからそれ以後のものでなく、それ以前のものではない、残存するものもほぼ同時代のものということができよう。後述するように付近には多くの五輪塔、宝塔が残存しており、何れも同じ時代、同じ内容と考えられるものが多いことから、この在銘五輪塔はその点に於て、人名と共に極めて重要な資（史）料といえよう。

(3) 宝塔について

宝塔とは、図に見る如くに、基礎・塔身・笠・相輪から成っており、塔身には首部がつけられていることが大きな特徴である。宝塔は多宝塔ともいわれ、法華經の「見宝塔品」に示されている多宝如来が釈迦を招いて二仏併座したという説にともどき「多宝如来に釈迦を招いて二仏併座した」ということからおこった。本来は「多宝如来全身舍利」を安置するものである。天台宗に於ては「法華經」を本經としていることから天台系の仏塔ともいわれている。真言宗に於ては大日如来をまつて「大日塔」ともよんでいる。従て天台宗・真言宗以外の宗派には用いられていない。この塔は地方色が強いものがある。大分県の国東塔などその代表であろう。

県内では加治木の日本山にある「仁治三年」「寛元元年」のものが最も古く代表的なものである。中には經塚の標識として建てられる場合も多い。薩摩半島においては図に示すような古式のものが多いが、大隅半島に於ては写真に示すような（下伊倉城址）特色をもつものが多い。例えば、相輪の形式は宝珠の代りに、宝珠と請花を一つにして冠帽状にしたものが多く之が特色といえる（宝冠的とよんでいる）。また、塔身首部にたての刻線を施しているのも特色であ



下伊倉城址の在銘五輪塔
(年代は永禄九年)

ろう。ことに肝付氏の勢力の多い所に見られることが多いことから、肝付氏関係のものとの見方もある。

下伊倉城址に残るものは四基で、高さは115cm～104cmと1mを少し超えるものである。相輪の宝輪は線刻のものが多い。

(4) 保瀬橋畔の宝塔・五輪塔群

下伊倉城址の北側、肝付川に面したところは以前「別府ヶ城」とよばれた城跡があったという。それに関係するものかあきらかではないが、北西の保瀬橋を渡った橋畔の水神社の前に、宝冠形の相輪をもった宝塔が九基あり、また、相輪が欠失し、塔身に菩薩像を刻し、背面と、背面に「丸（アン）」の梵字を刻したものがある。これは、串良川の拡張部分となる地点から移されたものといわれている。（『東串良郷土誌・県文化財調査報告書第34号 大隅国編』）

之については「九基の完形の宝塔（相輪は宝冠形）と五輪塔四基がある。相輪高は46cm前後で、宝輪の数は4～6輪で、高さは凡そ100cm前後で、肝付一族の供養塔であろう」と推定をしている。

三、その他

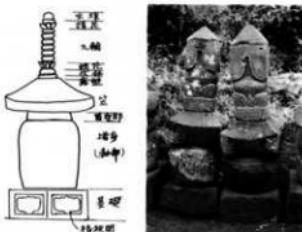
唐仁大塚古墳の南、共同墓地附近の民家の畠地内にも「日高ドン」の墓と伝える宝塔・五輪塔渡印塔などの石塔群があり。

また、大塚古墳南東数百メートルの民家の宅地内にも「薬師ドン」などとよばれる宝塔群がある。

然し之等類似する宝塔・五輪塔群の何れにもその時代や人物をあらわす銘文は見当らない。これらは推定をゆるされるならば、何れも下伊倉城跡に残存する宝塔や五輪塔と関係するものと考えられることから、「永禄九年」という年号を中心に、その前後に於ける串良地域の領主たちの動向を検討し「鮮田石口守」或は「道賢禪定門」などの人名、法名を手がかりとして問題の解決にあたる必要があろう。

四、「永禄九年」について

東串良郷土誌の249頁にはこの下伊倉城址の五輪塔銘を利用して「鎌田石見守道賢、永禄九年八月」の納骨五輪塔が存在することでも、肝付氏に大事件が起ったことが伺われるところがある。またこの年は肝付兼続の死去せる年である。



下伊倉城址の宝塔
(左図と大きく異なることがわかる)

永禄四年～九年にかけて大隅半島は肝付
・島津の対立したことは容易に伺えるし、
多くの史資料が残されている。

然しこそは更に検討する余地があり、石
塔銘文の解明は十分に検討を加える必要が
あろうと思われる。また、下伊倉城跡の石
塔には納骨孔はなかった。

今後の研究課題であろう。

(『旧地雜錄、後編2巻』『東串良郷土
誌』)



保瀬橋畔水神社社前の宝塔群
(下伊倉城址の石塔(宝塔)と関係あると思われる)

「鎌田石見守」について

飯田氏とあり、拓影から「餅田」と認め

られる、何れであるかもう少し史料をさがしてみる必要があろう。「石見守」法名が「道
賢」之等から探し求めることも必要であろう。

「石見守」については「旧記雜錄後編」に「永禄四年の廻城合戦」の「殉國名戦中」に田
命施の人々として「稻留石見守」の名がみえる。

五、なお近世の石祠が土塁の南山中に二基あった「文化十三年」のものである。「稻荷社」の
信仰祠で「下伊倉奥(組)」のたてたものである。

一方、県指定の「唐仁古墳139号墳」の塚上に「五輪塔」の水輪残欠と思われるものがあ
った。

石祠もあったというが、以前所有者の西之園氏(高山町平後園)が自宅に祠るという



図版1

清掃前



図版2

清掃後



銘のある五輪塔



火輪にある銘（拡大）

あとがき

一級河川肝属川が遺跡の北側をゆったりと流れしており、太古の時代より幾多の氾濫を繰り返しながら、周囲の土地を肥沃し、多くの恵みを授けてきた。遺跡の周辺は多くが水田地帯となっており、確認、全面調査とも早期米の刈入れ準備及び刈入れ作業と重なり、発掘作業員の確保に難渋したが、無事調査を終了することができた。

昭和62、63年度に実施した調査の報告書刊行にやっこぎつけられた。しかし、意を尽くせない部分も多く、本書を利用される各位において取扱選択しながら活用していただければ幸いです。

調査中は炎暑のなかで作業を進めていただいた地元の方々や、収納庫で整理作業を進めていただいた作業員の方々に感謝の意を表します。

発掘作業員

昭和62年度 外園製造吉、原田美代子、外園静子、下伊倉洋子、下伊倉祐子、東水流美代子、古城シズエ、田辺洋子、下伊倉カスミ、安部イトエ、外窪ケサヨ、外窪優子、内倉トメ子、米沢京子

昭和63年度 北園秀春、久保重則、古城利己、下伊倉祐子、外園静子、下伊倉陽子、原田美代子、杉木律子、有留弘子、倉ヶ崎京子、森園アツ子、新西サチ、今村タミ子、長野京子、川畑フミ子、今村マリ子、川畑アヤ子、鶴田アミ、伊倉タミ子、牧徳子、内門フサ子、山中ハツミ、坂元フミ、出水美奈子、平山美智子、下園シズ子、東水流ナリ、外園育代、原口モヨ、野元ノリ子、森園ミエ子、吉ヶ崎洋子、伊倉節子、門倉アツ子、瀬戸山八重、篠崎ノリ子、上掘ヒサ子、原口フミ子、園田レイ子、久保エチ子、久保サチ、園田マリ、森テル、角野ノリ、東水流ノブ、内みよ子、福元和子、平後園愛子、田辺ヒデ子、西之園良子、下園久子、福岡ナリ、富森冬子

整理作業員

昭和62年度 下畠節子

昭和63年度 松元雅子、行船順子、浜田幸江、宮岡雪子、竹下マリ子、高倉晴美、四丸久美、徳永美喜子、木田安枝、春山まり子、本多直子、野入満喜子、川畑明子、花田節子、岡村典子

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（50）

下伊倉遺跡・下伊倉城跡

1989年3月

発行 鹿児島県教育委員会
〒892 鹿児島市山下町14-50

印刷 株式会社秀巧社印刷
〒890 鹿児島市新栄町25-7